FA$T FOR SPEED FREAKS

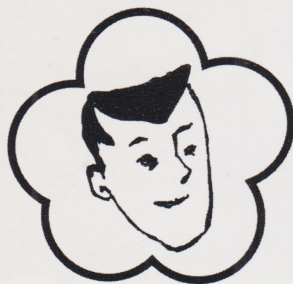
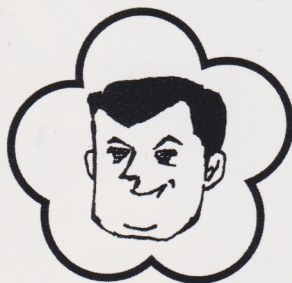
UNDERGROUND FAST HARDCORE MAGAZINE

ISSUE #2

350YEN

FAST FOR SPEED FREAKS #2
F-FACTORY

F-FACTORY

Good Design for Good People

F-FACTORY 2-31-7-103 Shimoyugi, Hachioji-shi, 192-0372 Tokyo, Japan
tel. 0426-70-6135 fax. 0426-70-6136 design@f-factory.com http://www.f-factory.com/

EDITOR
Efu Matsumoto

EDITORIAL DESIGN & DTP
F-FACTORY

F-FACTORY
2-31-7-103 Shimoyugi, Hachioji-shi,
192-0372 Tokyo, Japan

192-0372 東京都八王子市下柚木2-31-7-103
tel. 0426-70-6135 fax. 0426-70-6136 fast@f-factory.com
http://www.f-factory.com/

Front cover & This page photo : SLIGHT SLAPPERS
by Tomoyasu Yamashita
Back cover illustration by Efu Matsumoto

CONTENT POLICY

現在日本は80年代の『UWF』ブームを凌ぐ空前の格闘技ブームだが、私は素直に楽しめない。決して出場選手が100%二流というわけではないが、内容が薄くエンターテイメント性が欠如しているのが原因だ。海外で大した実力や結果を出していない選手を、あたかも超一流の格闘家であるかのようにメディアによってでっち上げられ、『PRIDE』や『K-1』こそ最強の格闘技であって、プロレスは"八百長で見せ物"などと言って喜ぶ馬鹿共を見ると、なんて貧相な考えをしているのだと思ってしまう。所詮娯楽にも関わらず、"本気"を求めてどうする？ ガッチガチに固められたルールによって、中途半端にスポーツ化してしまったのもマイナス要因だ。『PRIDE』を観てノールールだと言う奴はさすがにいないと思うが（もしいたらそれこそ笑っちまう）、もし"本気"の戦いを観たいなら"スポーツ"を観るのではなく、ストリート・ファイトの方がよっぽどリアルで面白い。

（左）高田延彦　（右）ヒクソン・グレイシー

約5年程前、『PRIDE』での高田対ヒクソンの試合は盛り上がった。高田は当時ベイダーや北尾達を倒し"世界最強のプロレスラー"と言われる程の実力と結果を残していた。ヒクソンに関しては、弟ホイスの初期『UFC』での活躍により一躍有名になった感もあるが、日本で行なわれた『UFC』で華々しく日本デビューをし、自称400戦無敗という肩書きの大きさを日本のファンにも見せつけた。プロレスこそ最強と信じる高田と、グレイシー柔術こそ最強と言い放つヒクソン。この試合には時代を越えたバックボーンが面白さをより深めているのは、ファンであれば当然感じていたはずだ。高田は当時『UWFインターナショナル』所属であったが、それ以前は『UWF』、『新日本プロレス』に所属していた。つまり、ファンの中では高田対ヒクソンだけでなく、前田対ヒクソン、長州対ヒクソン、武藤対ヒクソンといった図式を想像し、架空の世界ではあるけど可能性として語り合った。

結果は残念な事に高田の惨敗に終わったが、その試合後のメディアの対応に、今の格闘技ブームの内容の薄さが見え隠れする。メディアはこぞって高田は嘘つきだと決めつけ、高田批判を繰り広げた。日々、私のメディアに対する怒りや不満はつのるばかり。しかし、高田の先輩前田があるインタビューで言ったコメントに、私はメディアに対する不満や怒りは少し解消した。つまりこうだ。1年以上前から試合準備に望んだ高田。もし高田を批判するのであれば、高田を一流の選手として認めたからこそ試合に望んだヒクソンも批判することになる。また、プロだかアマだかわからん中途半端な連中が、高田は所詮プロレスラーだから負けたんだと言っているが、だったら半プロの奴等がヒクソンを倒せるのか？答えは100%ノーだ。(当時)ヒクソンを日本に呼ぶには、諸経費を含めると最低1億はかかったのだ。アンダーカードを考慮すると会場は最低横浜アリーナ・クラス。そこを満員にできる程の力を持っていなければならない。メディア側がそれを考えた上での高田攻撃なのか、ただ単に無知なだけだったのかわからないが、少なくとも出場者、主催者側はそこに試合としての魅力があるから大会を実行したのだ。要するに、試合結果だけを淡白に伝え、試合までの経緯を伝えていないから、仮に試合内容が良くても魅力が半減して報道されている。それを鵜のみにするファンがいるから質が悪い。なぜこの試合が組まれたのか、セコンドに付いてる選手は誰なのか等々、伝えるべき面白さはいくらでもあったはずなのに。

なぜ音楽ファンジンで格闘技やプロレスを熱く語るのかというと、私がプロレス好きだからというのも一理あるが、音楽シーンまたは業界にも同じような事があるからなのはいう間でもない。それはメディアによる情報操作によって、事実と違うことをファンに知識として植え付け、嘘の情報が後から事実に擦り寄っていく酷い現実の多さ。レコードやCDのレビュー等はあくまでもライターなり編集者側の感想に過ぎないにも関わらず、鵜のみにする読者も多い。ある意味仕方のないことかもしれないが…。しかし最悪なのはそれをわかっていながら、表向きメディアを鵜呑みにするなと言い、実は企業間の関係から大したことないバンドをでっち上げるメディアも多々あるということ。また、実力あるバンドが評価されないどころか、紹介すらされていない現実に不満がつのってこのファンジンは製作することになった。プロレス同様語れる面白さも理由のひとつかもしれない。様々な価値観によって、各メディアごとに意見や主張があるのは然るべき。本誌は未熟なファンジンとはいえ、『FAST』なりに速さにこだわっていきたいと思う。

FAST FOR SPEED FREAKS

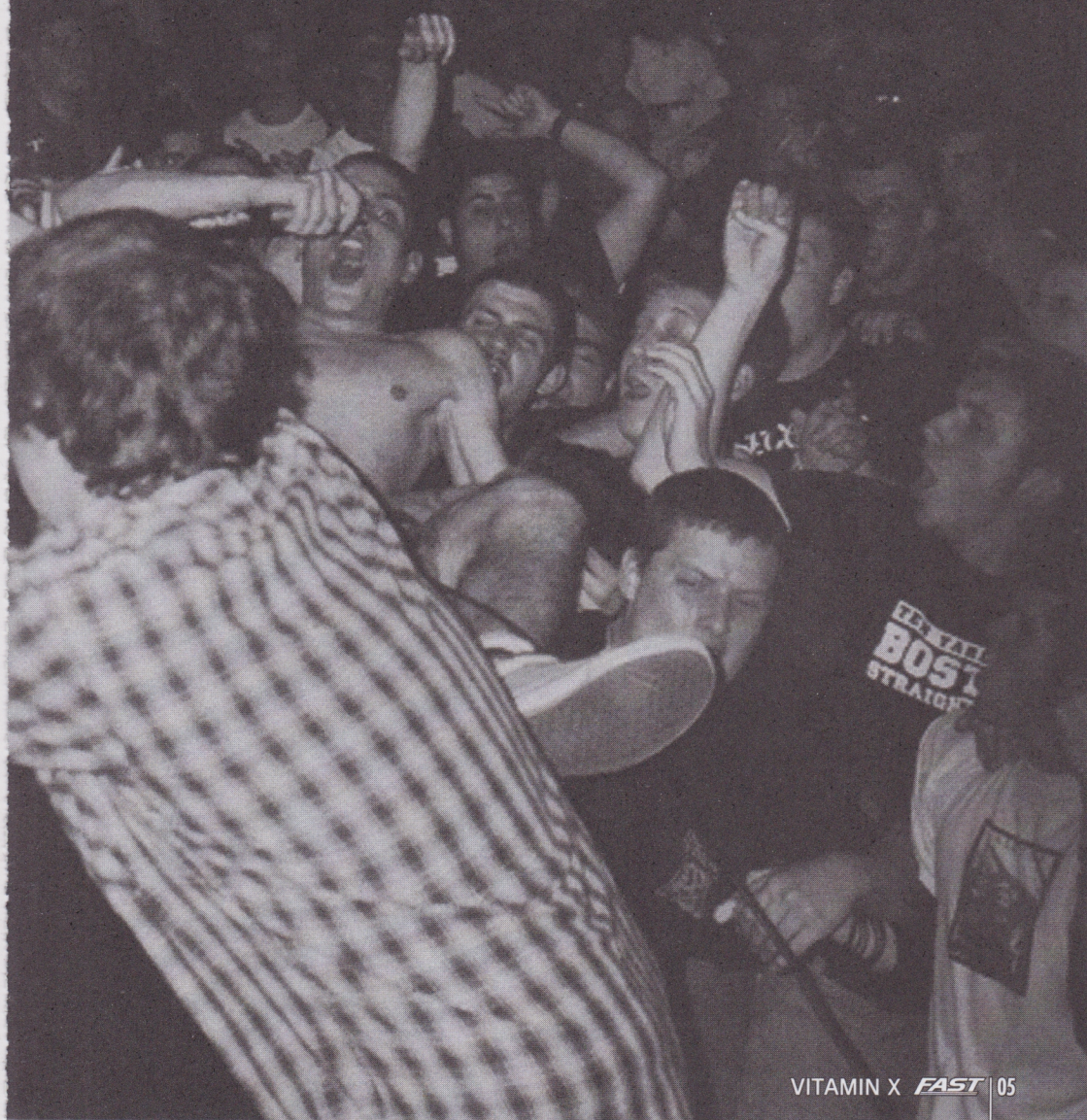
VITAMIN

昨年スウェーデンのDS-13に続き、オランダのVITAMIN Xがアメリカ・ツアーを決行。メンバー自らその経緯について綴ったレポートが『MAXIMUMROCKNROLL』誌に掲載され(『DOLL』誌No.174に転載)、皆が"Network of Friends"を大切にする熱いハードコア魂を感じ取ったことだろう。また先頃、そのツアーをサポートしたHavocとUnderestimatedより2ndCD/LPをリリース。真のハードコアを体現したサウンドとアティチュードを改めて披露しながら、スピードこそハードコアの必須条件、と言わんばかりのとてつもない速さでリスナーを圧倒し、スピード狂にとっては狂喜する他ならない。

今まで彼等について上記雑誌で絶賛されることは多かったが、VITAMIN Xの詳細について掲載した記事は少なかった。それで今回、改めてVITAMIN XについてギターのMarcにいろいろ語ってもらうことにした。

ちなみに使用している写真は、全てアメリカ・ツアー時のものです。

Interview Answered By MARC (Guitarplayer)

INTERVIEW

── まず最初にVITAMIN Xのこれまでの経緯を教えて。

Marc:僕達は1997年の初頭に、オランダのアムステルダムでバンドはスタートしたんだ。僕達のアイデアとしては、楽しいながらもポリティカルな要素を取り入れたストレイトエッジ・ハードコアをやることだったんだ。それで、Commitment Recordsからリリースされている僕達の最初のレコード2枚は、1980年代風のハードコア・バンドにインスピレーションを受けたものだったんだ。でも今は、1980年代風のオリジナル・ハードコア・パンクをプレイしているバンドがたくさんいる。僕達はレコードを作って、ライヴでプレイさえできればいいというのがバンドを始める目的ではなくて、まずは自分達自身が楽しみたかったんだよね。たぶん音楽的にキミはユースクルーだって言うかもしれないけど、ポリティカルなメッセージを持っているんだよ。最初のLPは2000年にUnderestimatedからリリースされた『See Thru Their Lies』で、初期1980年代のハードコアのように、たくさん速い曲をプレイするようになった。その初期1980年代のハードコアっていうのは、はっきりとした意見があって、みんなが言うところのポリティカルな歌詞を持つスラッシュのことだよ。このスタイルになったことで、僕達がアメリカに行く計画が実現に向けて一歩近付いたし、世界のいろんな人達に共感を得たんだと思う。ただ、オランダを含むヨーロッパの一部の人間からは、批判の声があったけど。そのLPの後は、2001年にHavocが出してくれたEPと、同じくHavocとUnderestimatedから2ndLP/CDの『Down The Drain』をリリースしたんだ。あとツアーに関していえば、僕達は1999年、2000年、2001年の3回ヨーロッパツアーをして、2001年と2002年の2回アメリカツアーをしているんだ。今は少しラインナップが変わっていて、ヴォーカルがMarko、ベースがAlex、ドラムがPaolo、ギターが僕だ。

── VITAMIN Xというバンド名の由来は?

Marc:このバンドを始めて間もない数カ月は、ほとんどお遊びバンドだったんだ。で、ちょっとおかしいバンド名にしたかったんだよね。あとはストレイトエッジだってことも表現したかった。ある日、ある人に僕達のことを「VITAMIN Xはどうだ?」って言ってきたんだ。僕達みんな「おぉ、それだよ、それ最高だよ!」ってね。当時はちゃんとしたバンドになると思ってなかったからコレで良かったけど、今はちゃんとバンド名について考えておけば良かったと思う。しかも、いろんな人からバンド名について酷評されたんだ。お前等はクソだとかとも言われたよ。

── 変な質問だけど、なぜキミはVITAMIN Xをプレイするの? VITAMIN Xはキミにとって何をもたらすんだい?

Marc:さっきも言ったように、お遊びバンドで始めたんだけど、僕のベストフレンドで最初のギターを担当していたEricが、ユーゴスラヴィアから来たMarkoのことを話してきたんだ。彼と一緒にハードコア・バンドをプレイしたいって言ってきて、ドラマーが見つかるまで僕にプレイして欲しいって言うんだ。これがまず僕がVITAMIN Xでプレイしはじめた理由だよ。MarkoとEricと僕でスタートしたVITAMIN Xだけど、ドラマーが見つかってから僕はギターに変わったんだ。それからはバンドでプレイするのも楽しくて、スタジオでのレコーディングも楽しいし、ライヴも楽しい。いろんな場所で、たくさんの人とコミュニケーションをとるのが楽しいんだ。もちろん仕事があるから、時々だけどね。バンドをやっててもお金にはならないし、バンドを続けていくにはたくさん出費があるけど、それ以上のものが得られるんだよ!!!

── キミ達は具体的にどんなバンドにインスピレーションを受けたんだい?

Marc:最初の質問の時に言ったけど、僕達はストレイトエッジなハードコア・パンク

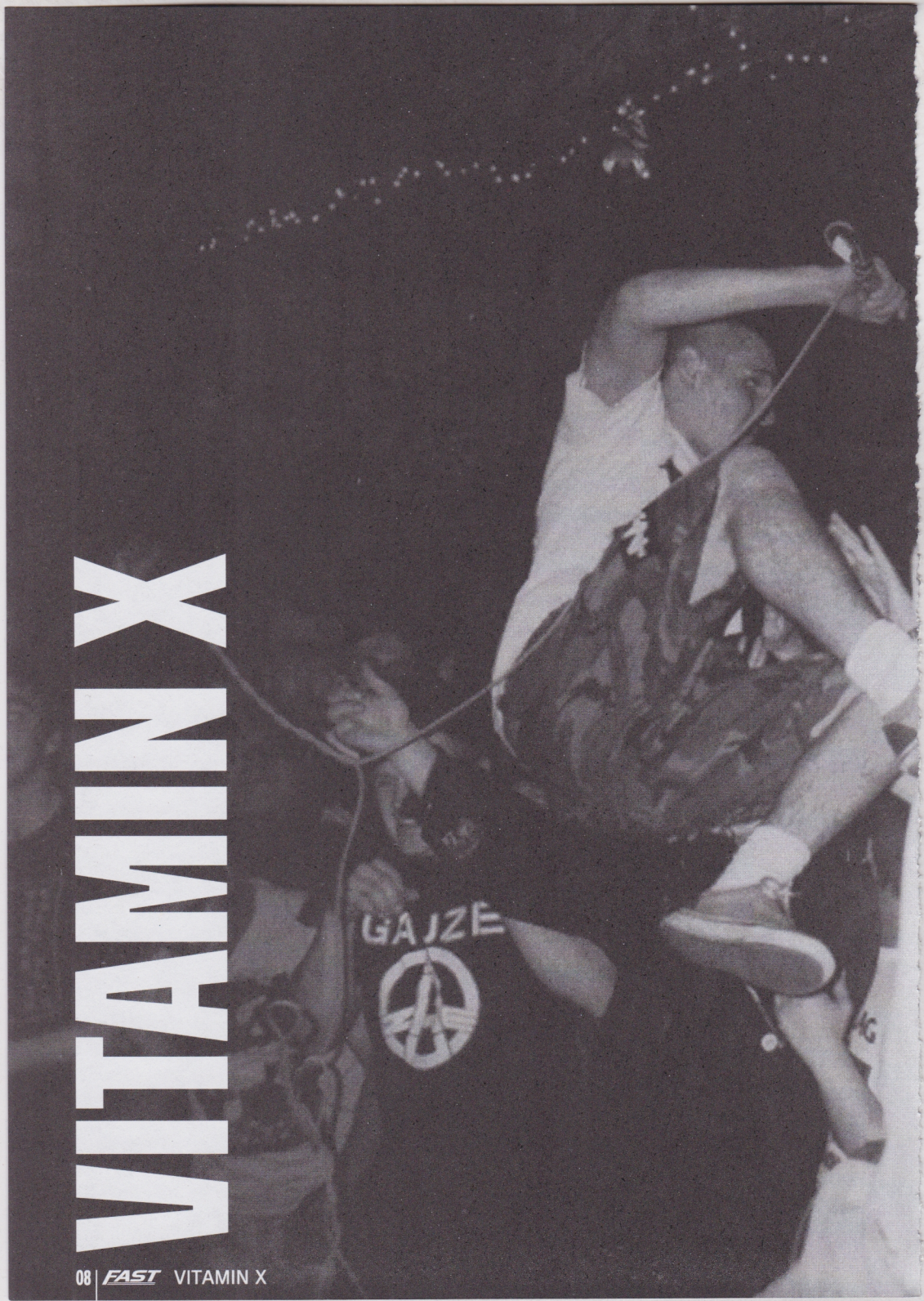
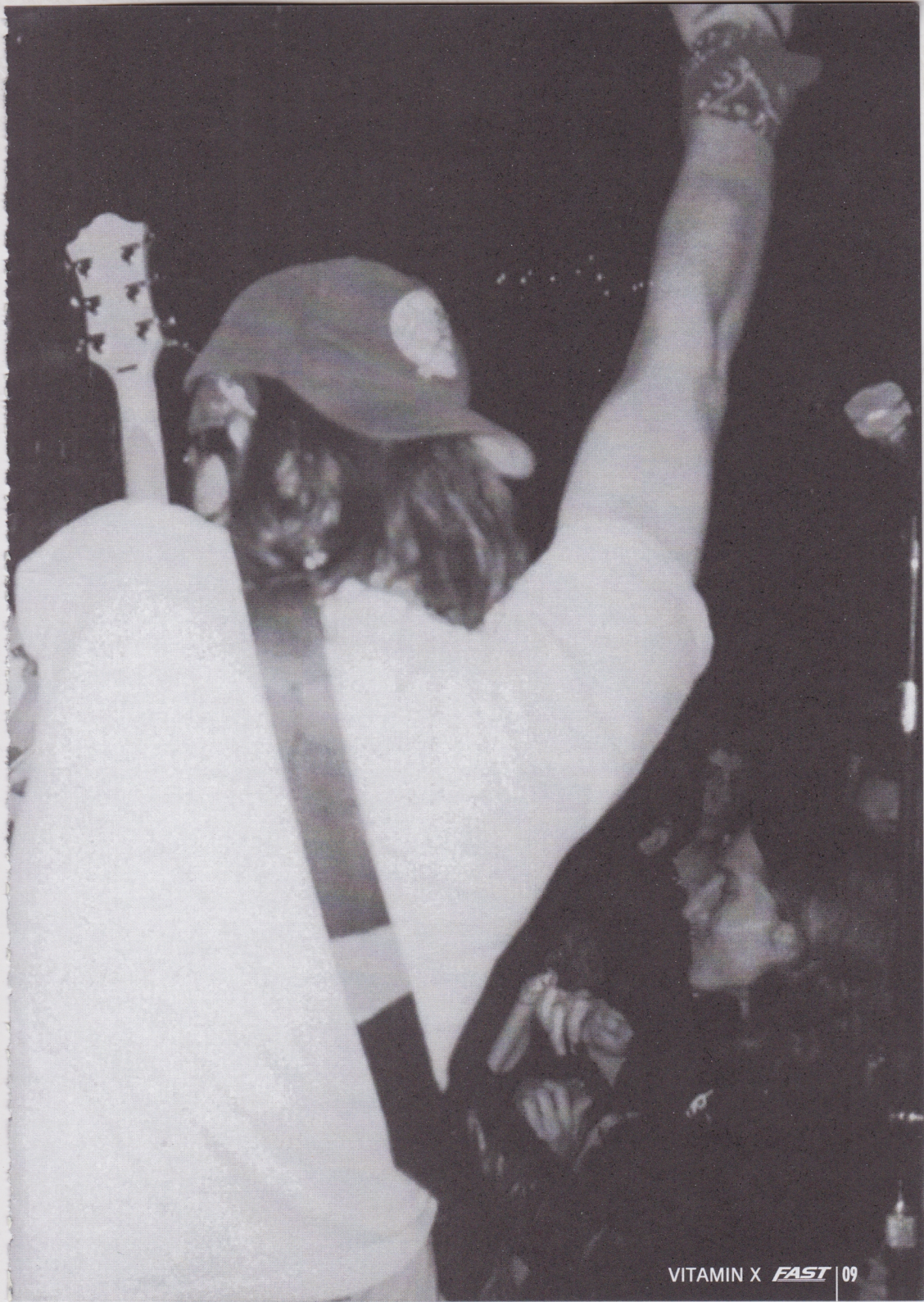
(左)2年前リリースされたLPで、見開きジャケット仕様。写真を惜し気もなく使って豪華な印象を与えているだけでなく、使用している写真からポリティカルな雰囲気を感じさせている。近年リリースされたハードコア作品の中でも、名盤中の名盤といえる。(右)リリース間もない最新作。詳細はレビューページ参照。

にインスピレーションを受けたよ。例えばYOUTH OF TODAY、GORILLA BISCUITS、SIDE BY SIDE、HALF OFF、NO FOR AN ANSWER、UNIFORM CHOICEとかの80年代のハードコア・バンドだね。最初の2枚のEPを出した後は、速い曲をプレイし始めたんだけど、その頃からBLACK FLAG、HERESY、CRUCIFIX、VOID、INFEST、ILL REPUTE、昔の日本のハードコア、昔のフィンランドのバンド等々を聴いていたね。Markoの場合はパンクとハードコアだけだけど、僕達はジャズやBLACK SABBATHといった70年代のハードロックとか、いろんな音楽に影響を受けているね。

── ところで、なんでキミはストレイトエッジという生活スタイルを選んだの?

Marc:僕がストレイトエッジになったのは凄く個人的なことなんだ。そして、Ian MackayeとMINOR THREATの言葉を聞くまでは、ストレイトエッジではなかった。もともとアルコール類やタバコの味が好きじゃなかったから、飲酒もしないしタバコを吸ったりもしなかったんだけど、ある時、パンクスに「お前はストレイト・エッジだ」って言われたんだ。どうして僕がストレイトエッジなのか、ストレイトエッジとは何なのか彼に尋ねたときから、僕は世間でいうストレイトエッジになったんだ。つまり、そういう生活スタイルがあるということをストレイトエッジのムーブメントから得たんだよね。VITAMIN Xはそういう理由でストレイトエッジ・バンドなんだ。もちろんメンバー全員ストレイトエッジだよ。だけど、僕達はストレイトエッジかどうかってことは重要ではなくて、生き方としてのストレイトエッジかどうか、それが重要なんだ。もっと飢餓、人種差別、ファシズム、性差別とかを考えるべきなんだ。僕はまたストレイトエッジについて言いたくなってきたよ(笑)。…ストレイトエッジは、多くの人が1980年か81年の地下シーンで起こった、ハードコア・パンク・ムーブメント時に始まって、その前向きな姿勢を持っているということも忘れてしまっていると思うんだ。極端な観念、マッチョ・アティチュード、メタリック且つ重厚なサウンド、非現実的で意味のない歌詞…、これらはストレイトエッジには必要ない。僕達VITAMIN Xは、アンチ・レイシスト、アンチ・セクシスト、アンチ・ホモフォビア達をリスペクトしているよ。

── 現在のハードコア・シーンについてはどう思う?

Marc:凄く良い感じだと思うけどね。アメリカ、日本、東南アジアとか世界中から新しいバンド、レーベル、ファンジンがたくさん出てくるしね。ポリティカルで凄く良い歌詞やメッセージを持ったバンドが世界中に存在している。いくつかグレイトなバンド名を挙げるとAMDI PETERSENS ARME、BETERCORE、OLHO DE GATO、HOLIER THAN THOU、TEAR IT UP、ETA、DS-13、TOTAL FURY、DISCARGE、

VITAMIN X

W.H.N?、KNIFE FIGHT、MAD RATS、SCHOLASTIC DETH、SHOT GUN、SICK TERROR、9 SHOCKS TERROR、LAST IN LINE、JELLYROLL ROCKHEADS、TO TIME LEFT、THE PROWLとかね。僕自身詳しく知らないけど、他にもたくさんグレイトなバンドがいるだろうね。

── オランダはどう?

Marc:オランダにも常に良いバンドがいるよ。BGK、LARM、THE EX、FUNERAL ORATION、MANLIFTING BANNER、SEEIN REDのような、誰でも知っているバンドがオランダにはいるよ。90年代中頃までシーンは死んでいたんだけど、1996年から97年頃からVITAMIN X、OIL、REACHING FORWARD、BETERCORE、POINT OF FEWといった新しいDIYハードコア・バンドや、Commitment、Wasted Youth Power、Reflections、Coalitionといったレーベル、そして新しいファンジンやライヴ会場が出てきて、再びシーンに活気が出てんだ。Royal Blood Recordsからコンピレーション盤もリリースされているから、オランダのハードコアはもっとチェックすべきかもね。SEEIN RED、BETERCORE、VITAMIN X、ALL TENSED UP、REACHING FORWARD、MIHOEN、SHIKARIとか25のハードコア・バンドが収録されていて、レイアウトも最高にグレイトだよ!!!

── HOLDING ONにも同じような質問をしたんだけど、VictoryやRevelationからリリースって可能性はなかったの?

Marc:彼等はたぶんVITAMIN Xを好きだろうね。だからキミの言っていることは正しいと思うよ。間違っていない。でも、彼等は気に入ってくれるかもしれないけど、僕らが彼等のことを好きじゃないからな。初期のRevelation Recordsがリリースしたレコードは凄く良いけどね。僕達は誠実で、ポジティヴで、クリエイティヴなDIYバンドなんだ。凄く値段の高いレコードを売ったり、音楽とかをコントロールされたくないから、メジャーやコマーシャルなレーベルから出したくないんだ。3回ヨーロッパ・ツアーとアメリカ・ツアーで、100%DIYで物事を進めることが出来た。もちろん、たくさんの素晴らしい人の助けがあってのことだ。DIYシーンにいる人のネットワークは強固なんだよ。つまりメジャー・レーベルと契約しても、お金を貰えるってことしかメリットがないんだよ。この音楽はキッズのためのものであって、ビジネスマンのためのものじゃない。誠実にクリエイティヴにバンドを続けていくには、メジャー・レーベルやビッグ・ビジネスに関わらずに、独立してやっていくことなんだ。そうやって金を稼いだりするのは好きじゃない。大会社なんてクソくらえだ! 会社というのは金と利益しか考えていない。苦しんでいる人達のことなんか、奴らは何も考えちゃいないんだ。

── 今回、なぜHavocからリリースすることになったの?

Marc:僕達はもともとHavoc Recordsの大ファンだったんだ。たくさんグレイトなレコードをリリースしているからね。あとCODE 13も好きだったから、Felix Havocのところから出すことにしたんだよ。実はCODE 13がアムステルダムでプレイしたとき、凄く速くてスラッシュな僕らの曲を気に入ってくれて、ストレイトエッジであるFelixと僕らのバンドのシンガーであるMarkoが話をしたんだ。ユーモアのある政治的、且つ社会批判をした歌詞も気に入ってくれてね。それでUnderestimated Records後、ハードコア・シーンをオーガナイズしているFelixに、リリースしてもらうことになったんだ。彼は1回目のアメリカ・ツアーを企画してくれて、ヴァンを用意してくれたり、いろいろ準備してくれたんだ。

── そのアメリカツアーについて、ちょっと話してくれるかな?

VITAMIN X

Marc：今までに僕達は2回アメリカ・ツアーをしたんだ。1回目は2001年に、もう1回は2002年に。最初のツアーは、Underestimated RecordsのAntonに『Chicago Fest 2001』でプレイしないかって言われたんだ。でも行くには費用がかかるから、どうせ行くなら、もっとショウをやりたいって思っていたんで、Antonにイーストコースト・ツアーを企画してくれる人はいないかって、聞いてみたんだ。ちょうど僕らの新しい7"EPをリリースすることになっていた。Felix Havocがその話を聞いて、すぐに彼は自分のヴァンでツアーし、いろんな意見をくれて、手伝ってくれることになったんだ。あと、僕達の大好きなHavocからリリースした7"EPのアートワークを担当してくれたLIFE'S HALTのErmieも、いろいろと手伝ってくれたんだ。イーストコースト・ツアーを手伝ってくれたんだけど、メールでのやり取りでウエストコースト・ツアーも上手いことやってくれた。2回目のアメリカ・ツアーの時は、45日間46回のシ

ョウをやったんだよ。同じくAnton、Felix、Ernieが手伝ってくれて、メキシコでも1回ショウをやった。2回とも素晴らしい時間を過ごしたと思うし、たくさんナイスな人と出会えたし、そしてクールなバンドとたくさんプレイできたし、とにかくグレイトなツアーだったね。しかもアメリカのキッズは凄く熱狂的で、毎回メチャメチャ盛り上がったんだ。アメリカのDIYパンク・シーンの凄さを思い知らされたね。アメリカや日本、ヨーロッパのたくさんの外国のバンドのプレイを観ることもできたし。これはほんとに凄い経験になったよ!!! そしてお金もあまりかからなかかったので、少しだけど利益もあったから、僕達の次のレコーディング代にまわしたんだ。

── そういったツアー時とか、言葉や文化の違いを感じたことってある？

Marc：いや、僕達はたくさん英語を喋れるわけじゃないけど、それはないね。オランダはヨーロッパの中では変わっているのかもしれないけど、みんな学校で英語を学ぶんだ。テレビでやる映画は全て英語なんだよ。だから上手くはないけど、みんな英語が喋れるし、多くの人が数言語か話せるんだよ。僕もオランダ語、英語、ドイツ語、あとほんの少しフランス語を話せるんだ。だからカルチャーショックを受けたことってないね。アメリカツアーに行った時もいろんなことがあったけど、ヨーロッパと同じだったし。少しくらいの違いはあるよ。例えば建造物。大きな街にあてはまることなんだけど、たくさん高層ビルがある。次は食べ物。ヨーロッパに比べるとファースト・フードが多いよね。次は社会問題だけど、アメリカの多くの人がとても貧しい感じが

VITAMIN X

する。というのは、西ヨーロッパと比べると社会保障制度が酷すぎるね。ヨーロッパの場合、みんな健康保険を持っているんだけど、アメリカはそうじゃない。あと一番の違いといえば、アメリカのチョコレートは最悪だ!!!

── 日本についてはどう思ってる?

Marc:日本はヨーロッパからとても遠い国だけど、いろんなところで日本の影響を感じるよ。たくさん日本車が走ってるし、テレビ、コンピューター、電化製品、おもちゃとかヨーロッパ各地で見かけるよ。あとアムステルダムでは日本人観光客も多いね。もちろん、オランダでは小野伸二選手がサッカーをプレイしているよね。彼は本当に良いプレイヤーだよね!!! 日本のハードコア・パンク・シーンについては、ヨーロッパ各地で知られているんじゃないかな。誰もが知っているのは、80年代のGAUZEやS.O.B.、STALIN、EXECUTEとかね。でも今も良いバンドはいるよね。例えばTOAL FURY、CRUCIAL SECTION、FUCK ON THE BEACH、SHOTGUN、LIE、ASSFORT、NO SIDE、JELLYROLL ROCKHEADS、EXCLAIM、FLASH GORDON、EVANCE、GAIAとかね。その中で2002年5月には、アメリカでTOTAL FURYと2回一緒にプレイしたよ。凄ばらしい時間を過ごせたし、彼等とは一緒にサッカーして遊んだりしたんだ。彼等はみんなナイスガイで演奏も良かったね。将来、たくさんの日本の人達の前でプレイできることを願ってるよ。メールもらって、みんなVITAMIN Xに興味を持ってくれているというのも感じている。だから将来日本に行って、ツアーをしたいよ。そして、日本のレーベルからレコードを出せるようになれるといいよね。

── ハードコアを聴いて、それに基づいた生活をすることって、どういうことだと思ってる?

Marc:まず、ハードコアは聴いた人に何かを考えさせる。もちろん音楽は、音そのものも重要だけど、ハードコアは音楽以上に大切なものがあるんだ。それは自由であり、フラストレーションを爆発させること。そしてハードコアを聴いたり、プレイしたりするのは凄く楽しい。でも僕にとってのハードコアっていうのは、ポリティカルな姿勢を持っているものだと思う。弾圧、貧困、レイシズム、性差別といったことに対して戦うことでもあるんだ。絵や映像で表現して発表したり、政治的活動をしたりといろんな手段があると思う。

── 今後の予定とかは?

Marc:これからも僕達はショウでプレイして、レコードを作って素晴らしい時を過ごすと思うよ。あと今後のリリース予定を。まず、1997年から99年までのDiscography CDを2003年にUnderestimatedからリリース予定。Lengua Armadaのコンピレーション『Hysteria vol.2』に参加予定。625からNO TIME LEFTとのsplit EP、僕らのライヴ・トラックを4曲収録したBLIND SOCIETYとプロモーション用スプリットを予定してるよ。ツアーとしては、2003年3月に南米ツアー、2003年末頃には東南アジアと日本ツアーをしたいと思っている。

── では最後に一言。

Marc:インタビューをしてくれてありがとう。僕達は日本に行って、日本のハードコア・パンク・シーンにいるファンに会いたいよ。速い曲をプレイしてクリエイティヴな事をして、コミュニケーションをとりたいよね。DIYを続けてハードコアで居続けよう!どこかで会えることを願っているよ。それはもしかしたら、日本ツアーの時かもしれないけどね。僕達に連絡を取りたかったらxvitaminxx@yahoo.comにメールを送ってくれ。

HOLDING ON

CRUCIAL HARDCORE FROM MINNESOTA

INTERVIEW

ハードコア・パンクに対する考え方の相違によって、ハードコア・シーンは分離してしまっているようだ。どれが正統なハードコアかと議論するのはあまりにもくだらないが、明らかにハードコアではないバンドがハードコアとしてもてはやされている現状には、うんざりする人も多いかと思う。HOLDING ONはニューヨーク出身ではなく、『PROFANE EXISTENCE』、現BLACKENED Distributionの本拠地であるミネアポリス出身である。ポリティカルな姿勢を持つバンドとの交流がありながら、一方でDILLINGER FOURのようなバンドとライヴをやっているという何の隔たりのないスタンスは、本当の意味でのハードコアを感じさせるバンドだ。

── バンド名の由来は？

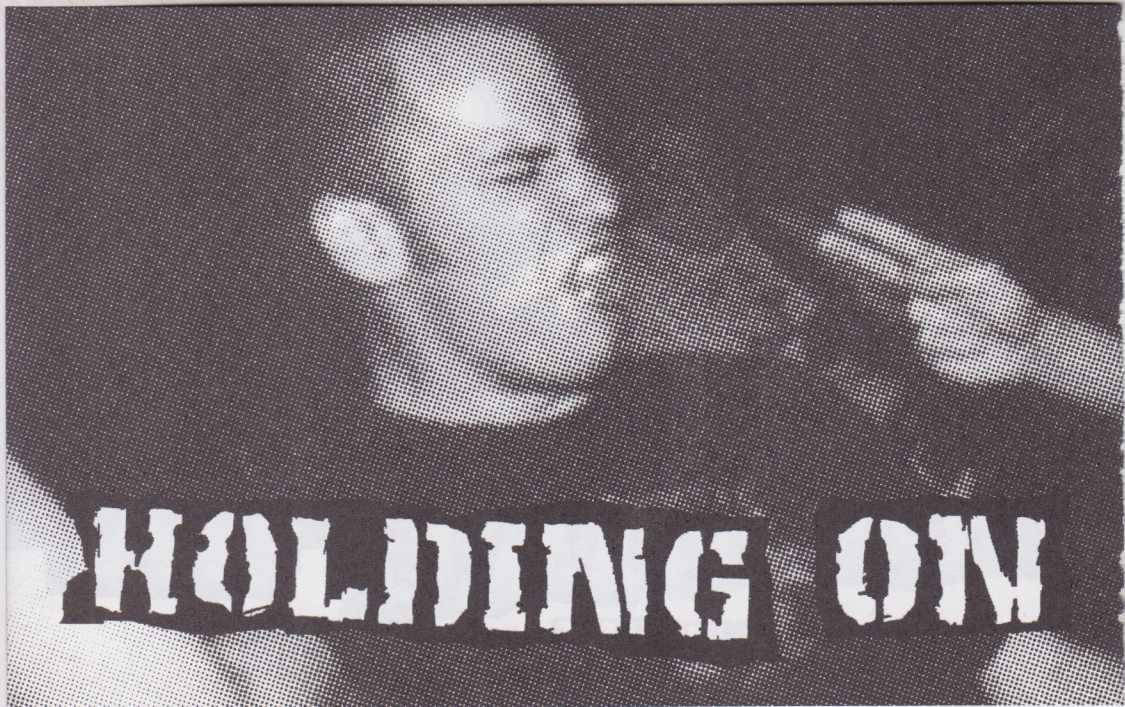
オリジナル・シンガーのDerekが、『Chung King』LPに収録されなかった曲のタイトルからとったんだ。基本的に若さであったり、好きなものをずっと信じていくってことなんだ。

── 現在までの経緯を教えて下さい。

Derek（ヴォーカル）、Pete（ギター）、Andy（ベース）、Karl（ドラム）というラインナップで1999年にスタートしたんだ。僕達はデモテープを製作し、そしてREAL ENEMYとのスプリット7"EP、コンピレーション用にレコーディングしたんだ。だけどその年にDerekが辞めてしまったので、代わりにAndyがヴォーカルをとることになって、Mikeが加入してベースをプレイしてくれることになったんだ。このラインナップで2000年にセルフタイトルの7"EPをリリースしてんだけど、2001年の最初に今度はMikeが辞めてしまった。そこでSeanが加入して、『Just Another Day』LPをこのラインナップでレコーディングしたんだよ。これが今のメンバーさ。

── その『Just Another Day』LPについてですが、HavocとTHDそして1%からスプリット・リリースってことになっていますが、どうしてですか？

本当はちょうどTHDからLPをリリースすることになっていたんだけど、THD側がHavocと1%にその話をして、スプリット・リリースにしようってことになったんだ。各レーベルは全く違うタイプだからリスナーも違うし、たくさんの人に聴いてもらえるんじゃないかってことで、この方法を選んだんだよ。結果的に素晴らしい反応を得ることができて、僕達にとって本当によかったと思うよ。

── その3つのレーベルによるスプリット・リリースですが、個人的にはHavocが最も興味あるレーベルです。特にHavocがリリースしているバンドとは違うような気もしたんだけど、どう思いますか？　あなた達は、音的にはいわゆるユースクルー系

に近いですから…。

そうだね。僕達は明らかにHavocがリリースしている他のバンドとは違うよね。でも自分達としてはユールクルーだとかスラッシュだと思っていないし、ファスト・ハードコア・バンドがピッタリだと思ってるよ。Havocの他のバンドって真正なスラッシャーやクラスティーだけど、あくまでもHavocはハードコア・レーベルであって、僕達もフィットしていると思ってるよ。

── あなた達の選択は正しかったと思います。でもVictoryやRevelationとかのレーベルもあなた達のことに対して興味示すんじゃないですか?

彼らからオファーはなかったけど、もしレコードを出さないかって言われても僕達はあのようなレーベルからリリースしたくないね! 今リリースしている全てのレコードがメタルコアやエモばっかりなのに、もし僕達にオファーしてきたら彼らを疑うよ。

── ところで『Just another day』LPで「I'm a dick」って曲をカヴァーしていますが、オリジナルの曲をプレイしているOSWALD ARMAGEDONって誰ですか?

彼らは2、3年前まで活動していたパンク・バンドで、基本的にはほとんどがカヴァー曲だったんだ。冗談半分でやっているようなバンドだったね。だから僕達もそんな彼等の笑える曲をカヴァーするのが凄くクールだと思ったんだよ。

── 現在のハードコア・シーンについてはどう思いますか? また、地元ミネアポリスのシーンはどうでしょう?

ここのハードコア・シーンは良い感じだよ! でもちょっとイヤだなと思うところもあるけど。というのはメタルコアはデカイ存在だけど、ファスト・ハードコアはチャンスを与えられていないんだ。ここのパンク・シーンは良い状況だから、もし僕達も普段からパンクのギグでプレイしていたとしたら、凄くいいなって思う。でも僕達がハードコアのギグでプレイしても多くのキッズは観に来ないけど、その状況が良いときもあれば悪いときもあるね。

──どんなバンドに影響を受けましたか?
僕達はいろんなタイプのハードコアとパンクに影響を受けたね。確実にMINOR THREAT、NEGATIVE APPROACH、SSD、7SECONDS等の80年代ハードコアに影響を受けているね。あとSICK OF IT ALL、CRO-MAGS、AGNOSTIC FRONTのようなニューヨーク・ハードコアだね。ユースクルー・ハードコアにも影響受けているよ。GORILLA BISCUITS、JUDGE、YOUTH OF TODAYとかね。僕らはそれらをそのままやるんじゃなくて、バランスよくそれぞれを取り入れていると思う。RAMONESやCLASH、STIFF LITTLE FINGERS、BLITZみたいなクラシック・パンクも、もちろん影響受けたよ。今いる多くのハードコア・バンドよりも、僕達はパンクに影響受けているってことだね。

──普段はどんなバンドと一緒にライヴをやってるの?
友達であるTEAR IT UPとKILL YOUR IDOLSとはたくさんプレイしたね。今年の夏はTEAR IT UPとショート・ツアーをする予定でいるよ。KILL YOUR IDOLSとは夏の半分くらい週末にプレイする。冬にはニューヨークのTHE CONTROLとツアー予定。みんないい奴ばかりだよ。あとDILLINGER FOUR、SEASON OF FIRE、MARTYR AD、RIVETHEAD、MILES AHEADとかの地元のバンドとも一緒にやってるよ。ミネアポリスの他のファスト・ハードコアだけじゃなく、パンクやメタルコア・バンドともやってるけど、いいバンドも悪いバンドもいるね。

──日本についてはどう思ってる?
とにかく凄いよね。グレイトなバンドとシーンがあるって聞いている。TOTAL FURYとは最近一緒にプレイしたけど、彼は最高だったよ。近いうちに日本でプレイできることを願っているよ。

──最後に今後のプランを。
Martyrからsplit7"EPを出す予定だよ。今はそれくらいかな。Bridge Nineから早くて年末リリース予定のLPのレコーディングを今年の夏にするよ。

── 初歩的な質問で申しわけありませんが、バンド名の由来を教えてください。

磯部:元々、自分と中野(Dr)で始めたバンドが、何かリリースするたびにバンド名を変えるという決め事で始めたけど、二人の性格上一回の変名で挫折し、このバンド名になった。意味は自分の当時のフェヴァリットアーティストのAPOCALYPSEというバンド名をあえて皮肉ったバンド名にしました。ちなみに、活動始動時はCUNT DECIDEというバンド名でした。

── 影響を受けたバンドは? またどういったところが魅力だったのですか?

磯部:THE STALIN。当時にしかない緊迫感が魅力でした。

中野: THE STALIN。非日常だった…。

青木:SENSELESS APOCALYPSEです。ヴォーカルとドラムだよねー!

── 現在までのバンドの経緯を教えて下さい。ここ数年、メンバーが入れ代わってますが…。

磯部:バンド経歴はHPでどうぞ(笑)。

中野:センスレスとは、磯部である!

磯部:いや、中野である!

中野:いや、磯部である!

磯部:いや、中野だよ!

(延々…)

── ヴォーカルが一人になって音楽的に変化はありますか?

中野:曲を作る立場からは無いが、バンド全体のサウンドはソリッドになって嬉しー!

青木:シェイプアップされて嬉しー!

磯部:無駄な騒がしさが無くなって嬉しー!

── よく東京でライヴを行なってますが、地元静岡でライヴすることってありますか? また地元のシーンはどんな感じなのですか?

磯部:SAME ATTITUDEという企画を地元で不定期にやっています。海外のツアーバンドなんかの地元でのサポートもしています。地元シーンはどうなんでしょうか? 色々なバンドが一緒にライブしています。

── SENSELESS APOCALYPSEが活動しはじめた頃から90年代までと、現在とでは大きくシーンが変わったように思うのですがどう思いますか?

磯部:変わっていないんじゃない?

中野:コネとか人間関係のみでつながってるシーンになっちゃったりしてたりしたらヤダなー!

── 流行とはかけ離れた音楽とはいえ、数年前に地下シーンで盛り上がったパワーヴァイオレンス/グラインドコアの人気はだいぶ落ち着いて、バンド数も一時よりだいぶ減ったように感じるのですが、どうでしょう?

磯部:いや、流行りだったんじゃないですか? 残る者

グラインドコア、ハードコア、クラストコアと様々な顔を覗かせ、静岡を拠点に活動しながら世界に目を向けているSENSELESS APOCALYPSE。いずれの音楽スタイルも彼等の場合は当てはまるのだが、私的にはやはりグラインドコアのイメージが強い。こう言ってしまうと先入観を与えてしまうけど、彼等のライヴを観ていると理想的なグラインドコアのライヴを展開しているのだ。私の知る限り、日本において彼等のようなスタイルのグラインドコアはいないし、いたとしても音のみ再現しているだけであって、ライヴで表現しきれていないバンドが多い。また、

は残る。消える者は消える。どうでしょう?

中野:盛り上がってる事も知らなかったし、落ち着いてる事も知らなかったし、バンドも減ってる事も知らなかった。ダメじゃん、俺…。

青木:パワーヴァイオレンス/グラインドコアとかカテゴライズするから盛り上がったりバンド数も増えたり減ったりするのだぴょ~ん。

── SENSELESS APOCALYPSEはグラインドコアだったり、ハードコアだったり、自由自在に音楽的に変化しても違和感を感じません。ですが、ここまで速

さにこだわったストレートなバンドって今あまりいませんよね？ 自分達の音楽について、どう考えていますか？

中野：元々センスレスは初めからハードコアバンドです。特にグラインドコアとか意識した事はありません。速さについてもこだわっていません。早く遅くなりたい！

磯部：いや、俺は速さにこだわってるよ！

—— バンドをやる一方で、Blurred Recordsを運営し

今のグラインドコアはPHOBIAのようなタイプやRelapse所属のグラインドコア・タイプが主流で、良い意味で本気で狂ったグラインドコア、例えばAxCxのようなタイプは極まれな存在とはいえ、少なくとも私としてはこのセンスレスは、後者タイプの要素を多分に含んでいると思う。そこに希少性を感じるし、何よりもライヴがカッコ良いのだ。

現在、活動停止中のセンスレス。9月頃には復活を予定しているので、この充電期間に溜めたエネルギーをその復活ライヴで爆発させて、またスピード・フリークスを魅了してほしい。

ていますが、自分にとってバンドをやるのとレーベルを運営するのとでは、どのような気持ちの違いがあるのでしょうか？

磯部：気持ちの違いというか、レーベルは個人でやっていますから、バンドに対する気持ちとかとは全く違いますね。ただ、センスレスで対バンしたバンドを気に入って、じゃあBlurredからリリースをって事もあるんで、つながりはありますね。あと、バンドでプレイしている時に、「社長！」って呼ばれる事は大嫌いです！

—— レコードをリリースするバンドの選考基準は？

磯部：知名度とか抜きに自分の目で観て、耳で聴いてかっこいいバンドですね。海外のバンドは観る事は出来ませんが、国内ならライブを観てから決めます。精力的に活動しているバンドをサポートして行きたいですね。でも精力的に売り込んでくるバンドは大嫌い（笑）。

—— 各レコードにつき平均1000枚くらいリリースしていますが、バンドのギャラはどのようにしているのですか？

磯部：ギャラはプレスした枚数の20％を現物で渡しています。いつかレコーディング代も出せるようなレーベルになりたいです（笑）。

—— 第一段のSENSELESS APOCALYPSE以外は全て7"EPでリリースしていますが、何かこだわりはあるのですが？ 例えばDIYハードコアはこうあるべきだ、とか…。

磯部：全くこだわりはないです。今度からCDもリリースしますし、今までCDをリリースするチャンスが無かったってだけです。まあ7"EPとか好きでしたし、アナログ世代だからかな？（笑）

—— 今までで一番評判の良かったレコードは？ また今後のリリース予定は？

磯部：特に評判の良かったのはV.A.-MEANINGFUL CONSOLIDATION 7"x2、NICEVIEW 7"かな。一部のマニアの間で評判が良かったのはANARCHUS 7"とGRUDGE 7"です（笑）。個人的に気に入ってるのはRUSTLER / SWINDLE BITCH スプリット7"です！ 今後のリリースは、神奈川のSU19B 7"とニューヨークのTHEY LIVE 7"がもうすぐリリースされます。その後は名古屋のOUT OF TOUCHの2nd 7"/CDで、その後に地元のDEVOIDっていうジャパコアのバンドのCDをリリース予定です。詳しくはHPで（笑）。

—— 今後の活動予定を教えて下さい。

磯部：センスレスは現在無期限活動停止中！ 9月復帰予定！ 今度Relapse Recordsからリリースされるコンピ CDに参加してますので、もし良かったら聴いてみて下さい！ インタビューありがとうございました！

〒421-3213
静岡県庵原郡蒲原町中482-1 磯部 学
tel 0543-85-3217
e-mail manabu@blurred.tv web address http://blurred.tv

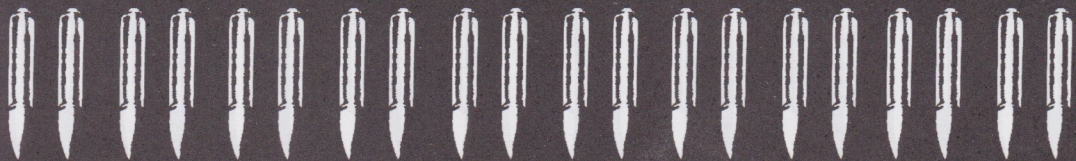
Manabu Isobe
482-1 Naka, Kambara, Ihara, Shizuoka 421-3213 Japan
e-mail manabu@blurred.tv Blurred hp http://blurred.tv

KRIGSHOT
ÖREBRO-MANGEL

INTERVIEW

昨年『Extreme The Dojo』でNASUMが来日。彼等の活動スタンスは明らかにアンダーグラウンド・レベルとはいえ、Relapseから2枚のアルバムをリリースしているゆえにメタル・グラインドコアのイメージが強くなった感があった。しかし、メンバー3人の後ろに掲げられたライヴ時のNASUMの垂れ幕は明らかにヘヴィ・メタリックではないし、クラスト色が濃かったのが印象的で、それを見た私はなぜかホッとしたのを記憶している。もっとも、その時の対バンと比較すればNASUMもクラストなのかもしれないが、やはり私自身、どこか彼等に対してアンダーグラウンドなイメージを持ってライヴに望んだからそう思ったのかもしれない。

そのアンダーグラウンドなイメージ、それはNASUMにもあることだが、各メンバーが他で動かしているバンドにはより強い地下臭が漂うからNASUMに対しても期待してしまうのだろう。中でもAndersとMieszkoが在籍しているKRIGSHOTに関しては、ライヴ活動が他に比べ少なく情報が少ないために、サウンド、メッセージ、そしてアートワークに至るまでどこか神秘的な印象を与えている。しかしKRIGSHOTが吐き出すサウンドからは、MOB 47等を優越したスウェディッシュ・ハードコアの理想系を突き詰めているから無視できないし、むしろ皆素直にKRIGSHOTに本腰入れてくれと思っているはずだ。

そこで今回はあえてそのKRIGSHOTにスポットを当て、メンバーから見たKRIGSHOTの位置付けを聞いてみた。

―― まず最初に、KRIGSHOTというバンド名の由来を教えて下さい。
Jallo：昔、MOB 47は"Krigshot"という曲があったんだけど、俺達はそこから頂戴したんだ。英語に訳すと"Threat"なんだけど、良い名前だろ？ ずっと世界は戦争の脅威にさらされている、という意味を込めているんだ。

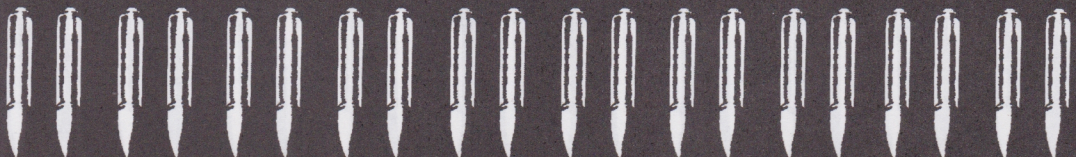
―― なるほど。では今までのKRIGSHOTの活動経緯を教えて下さい。
Jallo：俺はいくつか曲を作ってストックしていたんだけど、当時俺がやっていたいくつかのバンドにはフィットしなかったんだ。で、ちょうどNASUMでプレイしていたAndersとMieszkoにこの話をしたら、彼等は一緒にやらないかって言ってくれた。そしてアメリカのSound Pollutionから1stを出すことになったんだ、と記憶している。その時のラインナップはギター/ベースが俺、ドラムスがAnders、ヴォーカルがMieszko。で俺達は2枚の7"EPと2枚のLPを全てSound Pollutionからリリースしているんだ。

―― メンバー皆、他のバンド(MEANWHILE、NASUM)でもプレイしてるということですが、KRIGSHOTとして問題はありませんか？
Jallo：そうだね、みんな上手いこと他のバンドでプレイしているよね。KRIGSHOTとしてレコーディング・セッションするだけだから、今まで大きな問題が起きたことはないよ。ショウがダブル・ブッキングすることはないから、全く問題ないね。

―― なぜCDやレコードをSound Pollutionからリリースしているんですか？
Jallo：単純に俺達はSound Pollutionが好きだし、1つのレーベルから出せれば十分だと思うんだ。Sound Pollutionを運営しているKenが、俺達の音源を気に入ってくれているし、完璧な仕事をしてくれている。だから全く問題ないんだよね。Sound Pollutionは俺達のレーベルのようなものだから、Kenさえ良ければ今後もたくさんリリースするつもりだよ。

―― 他に良いレーベルはないの？
Jallo：もちろんたくさん良いレーベルはあるけど、俺達にとって良い状況ではないんだ。

―― さて、KRIGSHOTをプレイしていてどうですか？
Jallo：いや、KRIGSHOTは今まで大してライヴをやっていないんだ。でも来年には何度かライヴをやる予定ではいるけどね。それで日本やアメリカに行けたら面白いだろうね。

―― 今までどんなバンドに触発されましたか？
Jallo：今でも聴いているんだけど、MOB 47、RIISTETYT、DISCHARGE、SVART PARAD、CRUDITYといった初期フィンランド、初期イギリス、そして初期スウェーデンのハードコアを聴いている。でも、俺は自分達独自の音を出すだけで、それらのコピーバンドはやら

ないよ。

── 現在のハードコア・シーンについてはどう思いますか?
Jallo:一般的には良いとされているのだろうけど、軟弱な感じがするね。でも、もしかすると、それはそれで悪くないのかもしれない。ポジティヴな捉え方をすると、どんなバンドでも売れる状況だといえるしね。

── スウェーデンのシーンは?
Jallo:スウェーデンのシーンはたくさんパンク・バンドが出てきて、良い状況だといえるね。しかもどのバンドもクオリティが高いし、良い感じだよ。でもロウ・パンク・シーンのここ10年から15年くらいは、低迷していると思うね。もちろん今でも良いバンドはいるんだ。DISFEAR、SKITSYSTEM、NASUMとかね。

── 言葉や文化の違いで苦労したことはありませんか?
Jallo:はは(笑)、キミが言いたいことがわからないよ(爆笑)。俺は言葉の違いや文化の違いで困ったことは、今まで味わったことがないからね。

── というのは、最新作で歌詞やタイトルは母国語で歌ってますよね? でも英語もあるし….。
Jallo:スウェーデン語の歌詞の方が自然だし、簡単なんだよ。スウェーデン語は俺達の速い曲に、ほんとにピッタリ合うと思うんだよ。スウェーデン以外の人にも俺達が叫んでいるのは分かると思うんだよね。

── ところで、日本についてどういう感想をお持ちですか。
Jallo:今まで行ったことはないけど、バンドをやっている友達が何人かいるよ。行ってみたいよね!!! BASTARDS、C.F.D.L、DISCLOSEとか良いバンドがたくさんいるし、あと日本のレーベルとは何年もレコードのトレードをしているんだ。日本人はとてもナイスで礼儀正しいって聞いてるよ。

── 今後の予定を。
Jallo:今は特に何かあるってわけじゃないんだけど、来年には新しい7"EPとかでリリースする予定の曲をレコーディングするかもしれない。今のところ何回かショウも決まっているし、将来的には日本にも行きたいよ。

── では最後に、ハードコア・マインドとは?
Jallo:俺にはちょっとわからないけど、他人を苦しめることなく、自分自身を大切に生きること。

STRAIGHT FORWARD GRINDCORE

── バンド名の由来を教えてください。
大武：長くて読みにくいものがイヤだったので、つけました。特に意味は無いです。

── 影響を受けたバンド、またどういったところが魅力だったのですか？
大武：私自身は80年代スラッシュメタル、初期グラインドコア、デスメタル、ジャパコアなんかに影響を受けました。とにかく速いのが好きです。他のメンバーも同じ感じだと思います。

── 現在までのバンドの経緯を教えて下さい。
大武：2000年に1本目のデモを、翌年に2本目のデモと7"EPを、今年は今のところ3つのコンピレーションに参加しています。

── 普段はどういったバンドとライヴ活動をしているのですか？

屍体ジャケットからゴアグラインドを連想してしまった2ndデモテープに続き、
あのBad People Recordsより1st7"EPをリリースした宇都宮のグラインドコア・バンドGATE。
そのEPのファースト・インパクトもやはりゴアグラインド寄りのイメージが強いが、
それはあくまでもジャケットからの印象。
中身は従来の枠に捕われない前向きな音楽で、
日本でも有数なDISCORDANCE AXISを彷彿させるグラインドコアである。
そしてあくまでもグラインドコアを崩さずに、
そのスタイルを突き詰めるというバンドは希少である。
地元に限らず、
東京または全国区で活動してほしい期待の3人編成バンドで、
今回はギター&ヴォーカルの大武氏（以下敬称略）に話を聞いてみた。

大武：いろいろですね。でもあまりライブをやらないので声をかけてもらえれば出るって感じですね。メタル系、コア系どちらともやってます。

── 地元のシーンいついて教えて下さい。
大武：宇都宮はPLUTONIUMを筆頭にクラスト系のSCREEN OUT、DESTRUCTION、CONTRADICTIONやファスト系のBIGGER THAN YOUや、パンク系のWASTED LIFEなどががんばっています。メタル系だとORANGEがダントツですね。

── Bad People Recordsからリリースすることになった経緯は？ リリース後のリアクションはありましたか？ また満足していますか？
大武：Bad Peopleからはたまたまです。私がCATHETERっていうバンドにファンレターと一緒にデモテを送ったんですよ。そしたらそこのドラムのHaroldoがBad Peopleをやってて、GATEのデモを気に入ってもらってそれからですね、リリースが決まったのは。反応はあまりないですね（笑）。満足はしてますけど、やはりあまり急いで作るのは良く無いですね。ところでCATHETERは要チェックですね。すごくかっこいいですよ！ そろそろSix Weeksからニューアルバムが出ますよ。

── ジャケットは何の写真なのですか？
大武：明治か大正時代の猟奇殺人事件の現場の写真です。何となく使いました。

── 歌詞が掲載されていませんでしたが、どのような事を歌っているのですか？ 何か伝えたい事はありますか？
大武：個人的なことを歌ってます。自分が思ったこと、感じたこと、実際に体験したことを自分自身に言っているって感じです。あまりメッセージ性は無いですね。

── グラインドコアに限ったことではありませんが、アンダーグラウンド・レベルで活動しているバンド(例えばAVULSION)と、一般的に知名度のあるバンド(例えばSOILENT GREEN)はファン層を含めて分離してしまっている気がします。その辺の違いについてはどう思いますか？
大武：あまり感心が無いですね。っていうかよくわかりません。

── 更にここ数年、Relapse等の大型レーベルから数多くのグラインドコア・バンドがリリースされています。しかしその動きに反比例するかのごとく、アンダーグラウンド・シーンではゴア・グラインドが主流になっていますが、どう思いますか？
大武：別にいいんじゃないんですかね。うるさくて速い音楽が増えれば楽しいじゃないですか。

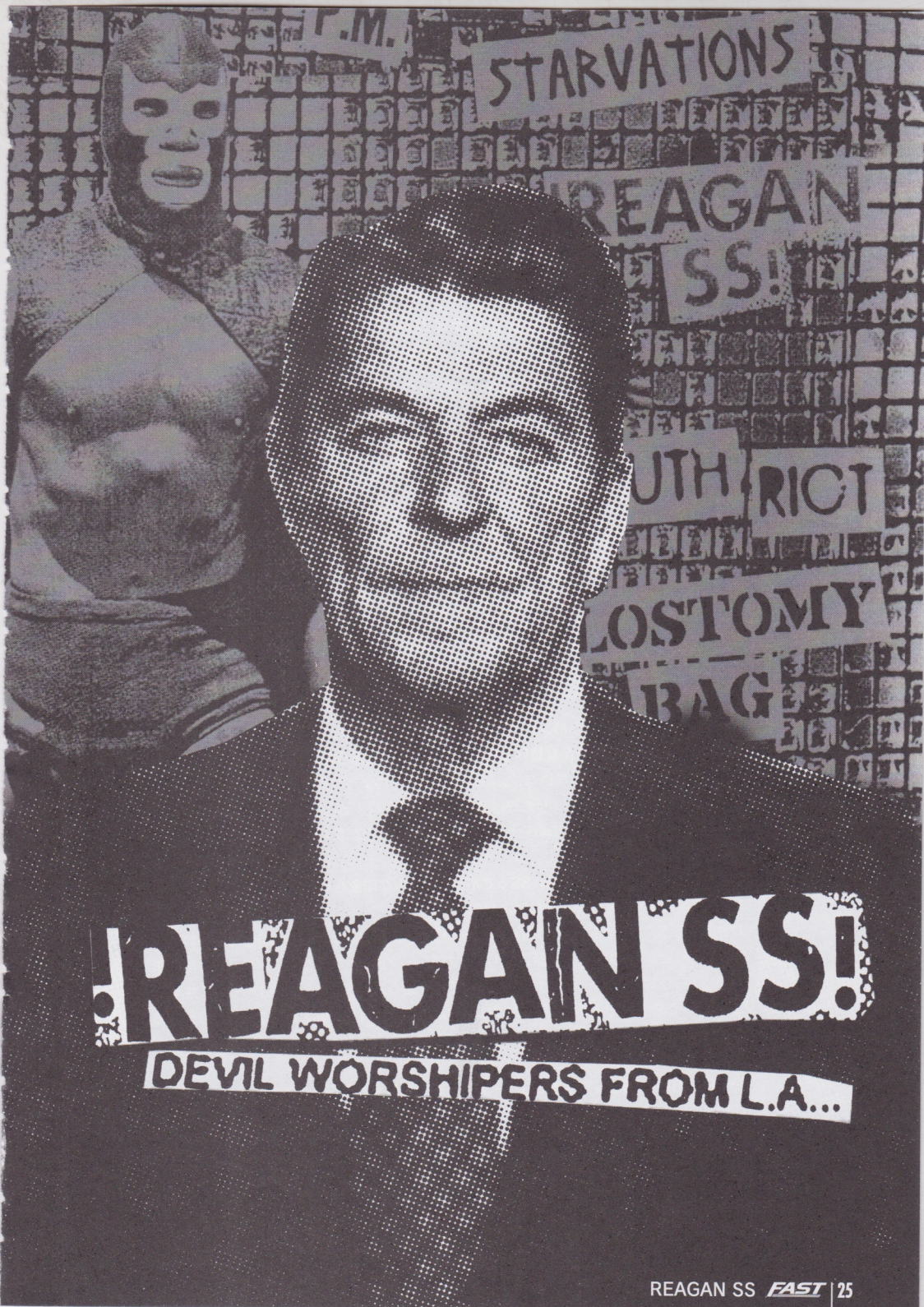
(上)見るからにゴア・グラインド炸裂でインパクト大の2ndデモ。良くも悪くもこのジャケットから先入観を与えてしまっているのは否定できないが、内容はというと極上のグラインドコアである。(左)今年Bad Peopleよりリリースされた1stEP。上記デモと同じ曲をいくつか収録している。

── 個人的な意見ですが、ゴア・グラインドは嫌いではありませんが、一時期のメロコア並に粗製濫造が目立っている気もします。どう思いますか？ しかもその多くがスタジオ・バンドのケースが多いですよね。
大武：あまりお金がないので、いろいろ聞けないのであまりわからないのですが、有名なバンドの誰かと誰かがプロジェクトをやり始めた、みたいなヤツの方がどうかと思いますね。

── 今後の活動予定を教えて下さい。
大武：ライブは今度LITTLE BASTARDS、ZONE DEFECTION、突撃戦車と対決する予定です。音源の方はNuclear BBQ Party Recordsの7"コンピ、ShitwormのUNHOLY GRAVEトリビュートといくつかのコンピレーションに参加予定です。SPLIT 7"、CDも予定しています。あとヴォーカルを募集しています。DISCORDANCE AXIS みたいな声出る人、お願いします。

GATE
Toshinori Otake/大武俊則
3779-59 Kaminokawa
Kaminokawamachi, Kawachigun
Tochigi 3290611 Japan

REAGAN SS!

DEVIL WORSHIPERS FROM L.A...

REAGAN SSというバンド名を『MAXIMUMROCKNROLL』で見つけた時、なんてパンクなバンド名なんだ!!!と思った。私的にはこのパンクな発想に興味津々。日本的に言えば"アンチ小泉首相"だとか"アンチ中曽根首相"といったバンド名をつけて活動しているのと同じじゃないだろうか。まず日本だと表立って活動するのは難しい名前だ。

REAGAN SSの歌詞は案外ポリティカルではないとはいえ、アートワークも"レーガン元大統領"にこだわり、私的には"パンク"でとにかくカッコ良いのだ。そんな最高にクール且つパンクな彼等にいろいろ聞いてみた。

INTERVIEW

――REAGAN SSの簡単な歴史を教えてください。

Danny S.S.:結成して1年以上経ったかな。Mattと俺でずっとやっているんだけど、スタート時はドラマーと"猿顔"の友達と始めたんだ(笑)。今はJohnがドラムを担当している。なかなかイイ感じだよ。

――REAGAN SSというバンド名でトラブルに巻き込まれたりしない? 日本だと首相の名前をつけるのは、いろんな意味で危なくてできないと思うんだ。

Danny S.S.:今のところないな…。将来に渡ってそのような危険にさらされないように願っているよ。今までのアメリカでは政府に対して批判することは問題なかったけど、9月11日以来「テロリズムとの戦い」という名のもと、自由が奪われた気がするんだ。

――そういう意味でREAGAN SSってポリティカルな印象を与えていますが、REAGAN SSの歌詞はポリティカルじゃないよね?

Danny S.S.:たしかに俺達の曲から、あまりポリティカルなメッセージを感じられないだろうね。というのは俺達は所謂ポリティカル・バンドじゃないから。ポリティカルな事を歌うバンドはたくさんいるけど、俺達は彼等が言うポリティカルな事よりも、人生や生活について歌う方がずっとポリティカルだし重要なんだ。普段の生活は、苦悩の日々の連続だよ。

――REAGAN SSとして今までリリースしたものを教えてもらえますか?

Danny S.S.:Gloom RecordsからJBAとのスプリット盤がリリースされていて、ヨーロッパ盤はCoalitionがリリースしているんだ。8月に625から7"EPがリリースされることになってるよ。あとはYouth Attack Recordsのコンピレーション盤に参加する予定になっているんだ。

――ハードコア・シーンについてはどう思う?

Danny S.S.：今までに世界中のシーンを見てきたわけじゃないからわからないけど、ハードコア・シーンはもっと個々の力を育てることが大切だと思うね。

── L.A.シーンはどう？

Danny S.S.：L.A.のシーンは凄くイイ感じだね。将来的にもイイ感じなんじゃないかなと思うよ。ただL.A.のハードコア・シーンは分裂してしまってるんだ。ハードコアはレコードや音だけでは判断できない音楽だから、そうやって分裂することは凄く馬鹿げたことだと思うけどね。

── どんなバンドに触発されましたか？

Danny S.S.：難しい質問だな…。俺達はハードコアと昔のロックンロール・バンドをミックスした感じなんだ。BLACK FLAGやBLACK SABBATHみたいな。

── 日本についてはどう思ってる？

Danny S.S.：日本はたくさんバンドがいて、凄い所だって聞いたよ。アメリカのハードコア・シーンはもっと日本に目を向けるべきだね。

── 今後の予定は？

Danny S.S.：来年にはツアーをしたいと思っている。日本にも行ってみたいよね。あとLPをリリースできたらいいなと思っているけど、その後は俺達もわからないな。

── 最後に、あなたにとってのハードコアと、ハードコアとしての生活を教えて下さい。

Danny S.S.：俺にとってのハードコアは人生であり、生きて行くための手段なんだ。毎朝起きて、そして働いて、いつも戦いなんだよ。それもハードコアだ。ハードコアは音楽やレコード、バンドだけじゃないんだ。ハードコアは"SOUL"なんだ。

GOREBEYONDNECROPSY

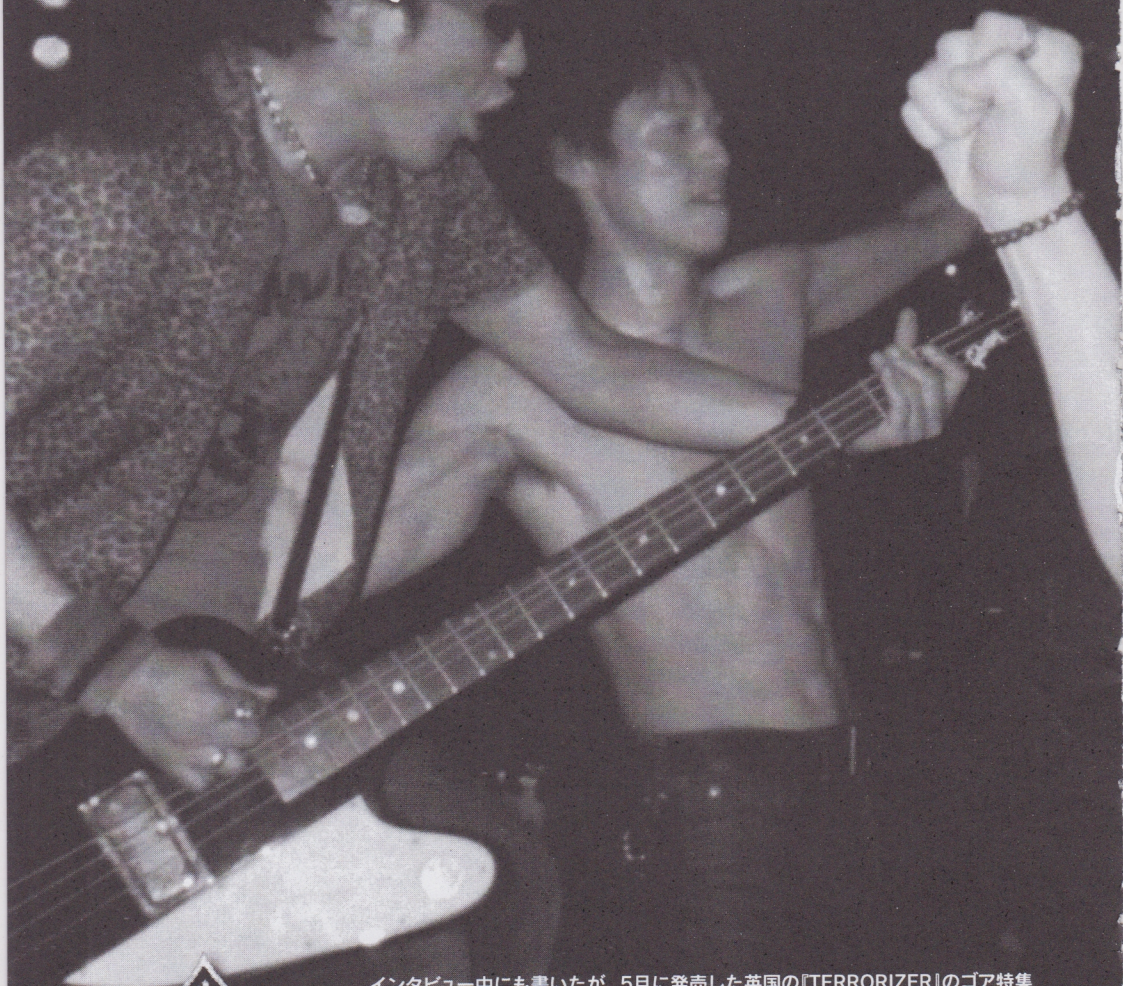
Analdrillingrind Harshit Core!!!

　インタビュー中にも書いたが、5月に発売した英国の『TERRORIZER』のゴア特集にGORE BEYOND NECROPSYの名がEXHUMED等と共に列ねていた。たしかに、過去にリリースした作品の中には屍体写真を用いたものもあるし、GORE BEYOND NECROPSYにはそういう側面もあるにはあるが、それはメンバーが言うようにバンド名から連想しているだけで事実と違う。もっとプリミティヴなロックであり、そんなこじんまりしていない。その真偽を知りたければ、彼等の強烈なライヴを見ればわかるはずだ。個性派揃いのGORE BEYOND NECROPSYのメンバー全員に、いろいろと答えてもらった。私的には意外な答えが返ってきて面白かったので、読みごたえあるのではと思うけど、やはり彼等はライヴに尽きるのだ!!!

Photo by Efu Matsumoto

── 初歩的な質問ですが、バンド名の由来を教えてください。
Akinob(B)：結成当初はバンド名は特に無かったよ(1989年頃)。その頃は、とにかくハチャメチャなグラインド/ノイズをやってたんだけど、コバちゃんが「もうちょっとちゃんとしたのをやろう」って言い出して、CARCASSみたいなエグイのをやろうってことになって、CARCASS目指して曲作るようになって、バンド名もCARCASSチックで意味不明な感じがしたので、GORE BEYOND NECROPSYって付けました。
Hironori(Noise)：Akinobとバンドを始めよう言っていた頃に彼の手紙に「バンド名はGORE BEYOND NECROPSYがいいなー」って書いてあったんだ、それで俺は次の手紙に「それで良いよ」って返事を書いたってわけさ。
Kiyonob(G)：あの当時は、とにかく血みどろでぐちゃぐちゃな感じにしたかった。ただ、勘違いされることが多いので名前変えちゃおうかな。もっとクールでセクシーなのにね。
Hayato(Drs)：NOISE-A-GO-GO'Sとか、FAECAL NOISE HOLOCAUSTなんかいいんじゃない!?

── 影響を受けたバンドは？ またどういったところが魅力だったのですか？
Mamoru(Vo)：GISM、VENOM、REPULSION、かっこいいから!
Hayato：ゴアビヨンド自体だね。周りに変な人が多いくて、まともな人がいないからすっごく魅力的!!! ドラムに関しては、LIP CREAM、DEATH SIDE、BASTARDといった日本のHardcoreと、ミックハリス!!!
Akinob：やっぱりNAPALM DEATH、CARCASS、SORE THROAT、EXTREME NOISE TERROR、DOOMなんかの80年代後期のイギリスのバンドからの影響が一番かな。とにかく音が物凄すぎて、窒息しそうなやつに凄く魅力を感じるよ。あとはFEAR OF GOD、CACOFONIA、REGURGITATE、ARSEDESTROYER、A.C.、CONFUSION(1st flexi)、WARSOREなんかの猛烈でノイジーなグラインドコアだね! とにかく強烈でsickで、crazyなヤツならハードコア、ノイズコア、ノイズ、パンク、ロックンロール、ガレージなんかにもやられまくってるよん!!!
Kiyonob：本当に名前をあげていったらきりがないけど、グラインドコア//ハードコアとかノイズにはやっぱり音のキョーレツさ、圧倒的なパワー、それからスピード感。とにかくガツーンてくるところ。ロックンロールからは、シンプルでキャッチーでノリノリなところ。まあ、どんな音楽でも衝動的っていうか、コントロールが効かなく暴走している感じで、重要なのはリズムにノリがあるかだね。ノリがないとダメ。自然と体がクネクネしちゃうようじゃないとね。
Hironori：影響を受けたバンドはZiggy Stardust and The Spiders From Marsだ。そのすべてが魅力的だ。

── 現在までのバンドの経緯を教えて下さい。
Hironori：俺はハイスクールの頃ガレージって名のパンク・バンドをやっていた。その後しばらくはバンド活動をしていなかったが、Akinobと出会ってGORE BEYOND NECROPSYを始めたってわけさ。
Akinob：ずーっと前はハードコア・バンドやってたよ。レコード出したのはMORBID ORGANS MUTILATIONっていうバンドで、AGATHOCLESとのsplit 7"EPだったなあ。で、M.O.M.はEXTREME NOISE TERROR、DOOM、RIPCORDからビビビッと来た感じのハードコアをやってたんだけど、もうどうしようもなくグラインドコアやりたくなって、清ちゃんとコバちゃんとGBNやり始めたんだよね。最初は平行してやってたんだけど、M.O.M.のヴォーカルだったハンちゃんが実家(九州)に帰んなきゃならなくなっちゃって、こっちに重点置くようになってもう10年以上経っちゃったって

感じだよ。
Kiyonob:ドラムにハヤトくんが加入したのが、こんなに長く続いている大きな要因だね。今までに3本のTAPE、11枚の7"EP、それから2枚のアルバムを出したよ。MERZBOWの秋田さんとやったのをいれると7"が12枚に、アルバムが3枚になるね。やっぱり最新作の『Fullthrottle Chaos Grind Machine』が一番お気に入りだね!
Hayato:もともとは地元でハードコアとか、ノイズコアをやってたんだけど、MASS GENOCIDEやり始めた時にGBNがドラム探してるって聞いて、「オレしかいねーだろ!!!」って思って入ったんだよね。でも、このバンドにはいってからすべてが狂っちまったよ。

── 普段はどういったバンドとライヴ活動をしているのですか? 一緒にやるバンドにこだわりはあったりしますか?
Akinob:ライヴは色んなバンドとやってるよ。GRUDGE、REALIZED、D.I.E、肉奴隷、SENSELESS APOCALYPSE、DIE YOU BASTARD、CSSOなんかとやるのはすっごく楽しいけど、かっこいいバンドとだったらジャンルを問わずオッケー牧場!!! くだらねーCock Rockカス野郎共とは、やりたくないけどね。
Kiyonob:しびれるようなバンドと一緒だとうれしいね。
Hayato:そうだね! かっこいいバンドとガンガンやってきたいねー。

── 基本的に東京で活動していますが、地元神奈川のシーンはどうなのでしょう?
Kiyonob:地元にシーンなんてないよ。地元でライヴやったことないし。
Hayato:暴走族ばっかり! あとはラッパー君とか、メロコア君みてーな、どうしょもないのばっかだよ!!! かっこいいバンドやってる奴なんて全然いないんじゃない!?
Hironori:まあ小田急沿線にはREALIZEDの平田、ウーヤン、荒金なんかがいるけど、シーンなんて呼べるのはないよ。詳しく知りたかったら、ワイルドマネーコウスケに聞いてみてくれ!!!

── GORE BEYOND NECROPSYは幅広い層に知られていますよね。5月に発売した英国の『TERRORIZER』のゴア特集にも掲載されていたし。バンドとしての大きさを感じるときってありますか? 今も海外からオファーはあるのですか?
Mamoru:幅広い層に知られているかどうかはよくわかんねーけど、バンドを知名度なんかの大きさで感じることはねーな! 海外オファー? わからん。
Akinob:まあ10年以上やってるし、それなりに海外からも音源出してるだけなんだけどね。バンドの大きさってのは、よくわからないなあ。オファーはいっぱいあるけど、出したいと思うタイミングってあるでしょ? そういうの以外はお断りさせてもらってます。まあチャンスがあればどんどん出して行きたいけど、新しい音源には新曲入れたいからオファー全部受けるのは難しいよ。『TERRORIZER』zineに載ったのは、ただ単にRelapseからCD出してたからだと思うよ。バンド名にGOREって付いてるから勘違いしたんじゃない!?
Kiyonob:大きさなんて全然感じないよ。ライヴやるたびに満員で、かわいい子猫ちゃんがキャーキャー言いながら追いかけて来るなんてことがあれば少しは感じるかもしれないけどね。

── GORE BEYOND NECROPSYのライヴはいつも楽しいですが、ある意味レコードのジャケットからイメージするゴアな印象はありませんよね? どうでしょう?
Hironori:ゴアかどうかが重要なのではない。ロックンロールかどうかが問題なんだ。腐乱した外科医が患者を生きたまま解剖するなんて、「サイコーにロックンロール!」

Photo by Efu Matsumoto

なんて思ったものだよ。つまり、ロックンロールかどうかなんだ。

Mamoru:ステージでゲロはいたり、血まいたり、チェインソー振りまわしたり…どこかの外タレバンドみてーにやるのなんて、オレの趣味じゃねーなあ。かといって拳あげるだけのライブもつまんねーよな! とにかく緊張感があって、でもこりゃ最高っつって笑っちゃうみたいな感じ。そんなのがいいね! あくまでショウなんだから、観てて面白くねーのなんてやってる方もつまんねーし、ライヴやる意味ないんじゃねーか!?

Akinob:別に俺達ゴア・グラインドじゃないしね～。音も、曲も、音源も、ライヴも、とにかく何でもカッコ良くて、ハチャメチャなのにしたいだけなんだよね～。他の誰かさん目指してやってるわけじゃないし、自分が楽しくないとやってる意味ないから、とにかく全部がFullthrottleで爆裂しまっくってるのにしたい!!! そういうのを全部ひっくるめてGBNなんだよ。

Kiyonob:ライヴが楽しいって言われるのは、すごくうれしいよ! やってる方も最高にハッピーなひとときさ。

Hayato:ライヴのときは後ろで叩いてッから良く分かんねーけど、あとでビデオで見るとすっげー猛烈に痺れちまう!!! やっぱ、ライヴはこんなノリでガンガンやってきたいね。特に、最近のコバちゃんCHECK IT OUT!!!

── 音楽を通して何か伝えたいことってあるのですか?

『Fullthrottle Chaos Grind Machine』 on Blurred Records

Mamoru:伝えたいこともわかんねーのか、Kill the Cock Rock!!! だね～。世の中偽者が多いから騙されんなよ!

Akinob:自分自身に正直であれ! ってこと。

Hironori:Let's Spend The Night Together! & Mother Fucker!!ってとこかな。

Hayato:メディアの言ってることなんて鵜呑みにするな!!! 自分で考えて判断しろってこと。

Kiyonob:それから全てのいかした音楽はELVISから始まったってこと。常に靴をカタカタ鳴らしてろ!

── 毎回ナイスなジャケットですが、比較的最近Blurred Recordsからリリースされたで、MOTORHEADをパロったのがありましたが、何か深い意味とかあるのですか?

Hironori:MOTORHEADは大好きだ。

Mamoru:好きだからに決まってんだろ。

Akinob:MOTORHEADは中学の頃からずーっと好きだからだね。あのブタちゃんは痺れるくらいカッチョ良いから、勝手に使っちゃったよ!!!

Kiyonob:俺は中学の時MOTORHEADの追っかけをやってたんだ。レコードジャケットのメンバー写真にぶっとんでね。音もラウドでFILTHYで最高だろ。それ以来、Fast EddyみたいなGuitar Manになりたくなっちゃったんだよねー。ストラトは大っ嫌いだけど!!!

Hayato:MOTORHEAD最高!!! Filthy Animal Taylorみたいな男になりてーよ!!!

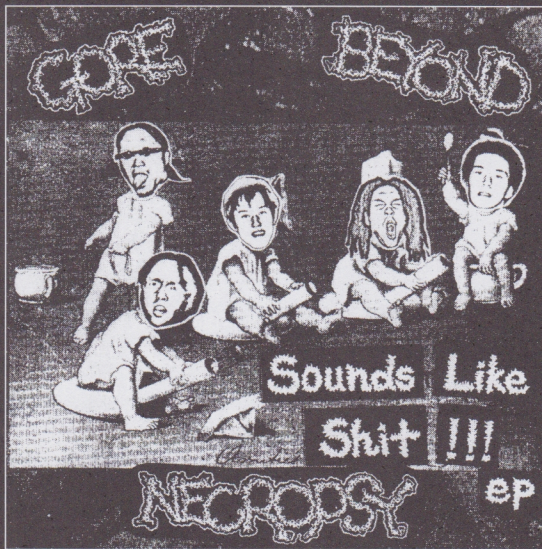
── ここ数年、大型レーベルから数多くのグラインドコア・バンドがリリースされて

います。しかしその動きに反比例するかのごとく、アンダーグラウンド・シーンではゴア・グラインドが主流になっていますが、どう思いますか?

Mamoru:グラインドコアの知名度は上がった点ではいいんじゃねーの? マーケットが広がることでのメリットはあると思う。なぜなら自分がそうだったように、聴きたいバンドの音源を海外トレードなんかで手間かけて聴く必要がなくなったからだ。ゴアグラインドが主流になっているのは良いことなんじゃないかな? その中からすげーバンドがまた出てくるのに期待する!!!

Akinob:最近のグラインドコア・バンドは、あまりチェックしてないので、ほとんど分かんないな。たまに雑誌に載っかってるディスク・レビューなんか見ても、欲しいと思うのなんかさっぱりだし。メタル・チックなのには全然興味ないし、そんなのよりはRip Off Recordsから出てる爆裂パンクロック・バンドの方が、何万倍もかっこいいねえ。

Kiyonob:何が主流かなんてことより、自分達にしか出せない音をやるって事が大切だよ。

Hayato:オレらは、オレらの好きなようにやってくだけ。クソ・メタルなんていちいち気にしてらんねーよ!

『Sounds Like Shit!!! ep』on Blurred Records

── ただ個人的な意見ですが、ゴア・グラインドは嫌いではありませんが、一時期のメロコア並に粗製濫造が目立っている気もするんです。しかもその多くがスタジオ・バンドのケースが多いですよ。

Hironori:そのようなバンドの事はあまり知らないからなんとも言えないが、スタジオ・バンドで彼等は満足しているのかな?

Akinob:ゴア・グラインドっていったい何!? ま、その辺はいいとして、バンドやってて一番楽しいのは、やっぱライヴじゃない!? 俺には全く理解できねーや!!!

Kiyonob:なんで増えているかにもよるけど。「血なまぐさいの大好き!!!」って奴がふえているのかな!? 犯罪に走るより全然いいじゃん! ただ、「流行っているから俺達も」っていうんなら話は別だけどね。流行りばかり追いかけている奴なんてくだらねーのばっかだろ!

Mamoru:オレもゴア・グラインドは嫌いじゃない。アンダーグラウンド・シーンが活性化するのであればよい! 例えるのはどうかと思うんだけど、メロコアにしてもOFFSPRING辺りからわけわかんなくなったけど、LEATHERFACEなんかはよかったよ。同じこと言えるんだけどゴア・グラインドでもなんでもいいんだよ。わけわかんなくなっちゃったシーンの中でも本物だけ見つけられたらいいんじゃないの? GBNのスタイルから言えばスタジオバンドってのは理解できねーな。気合い入んないっしょ!

Hayato:やっぱりライヴが一番だね。スタジオ・バンドなんて絶対嫌だ!!!

── 話は変わりますが、Harshit Recordsについて教えて下さい。選考基準は?

Kiyonob:何かケツの穴にビビッと来るようなかっこいいバンドを出したいと思っているよ。ただ、常にRAW、FILTHY&HARSH!でいきたいから、"クリアでタイト"なんてのはお断り!って言っても是非出してほしいって全然言われないけどね。

Akinob：そうそう！　体中の穴と言う穴から物凄く濃いエキスを出させてくれるような強烈なやつを出していきたいね!!!　ナチュラルトリップさせてくれるやつなんてもう最高にオッケー牧場だね!!!

――GORE BEYOND NECROPSY/Harshit Recordsの今後の予定を教えてください。

Kiyonob：今GBNとARSEDESTROYERと肉奴隷の3-Way split LPを作ってるとこだよ。予定より大分遅れちゃってるけど、なんとか早く出せるように頑張ってます。元GIBBEDのVoだった小澤ちゃんのMeat Box RecsとHarshitとの共同リリースになる予定。グラインドコアの初期衝動満載でメタル度0、キチガイ度測定不能の猛烈盤なので、みんな4649ね。そのあとは、またCDかLP出したいんで、また曲作り始める予定。ライヴはとにかく今まで通りFullthrottleで、強烈なのをバリバリぶちかまして行くんで、企画者の皆様ドシドシ声かけて下さい。

Hironori：当面の、そして必ず果たしたい目標は「ロックの殿堂入り」だ。Bowieは我々より一足先に殿堂入りを果たし様だが、彼等（ジャガーやヘンドリックス）とならぶ殿堂入りが出来た場面を想像するとたまらなくエキサイティングだ。そうは思わないかい？

Hayato：これからもズッコボコにキメまくって行くんで、そこんとこ夜露死苦!!!　海外もまた行きたいねー!!!　誰かお金出してくれないかなー!?

Kiyonob：最近みんな退屈でしかたねーらしいな。それならオレ達のギグに来るしかねーな。

Mamoru：オレのショウを観たけりゃな!!!

GORE BEYOND NECROPSY
c/o Akinob Ohtaki
837-6 Horinishi
Hadano-shi, Kanagawa
259-1331 JAPAN
http://www.gorebeyondnecropsy.com/

GORE BEYOND NECROPSY

Analdrillingrind Harshit Core!!!

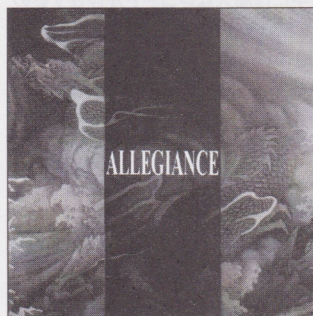
Photo by Efu Matsumoto

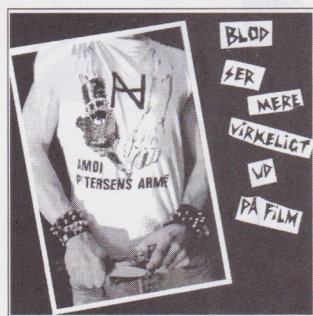
本誌『FAST』で紹介するレコードやCDは、あくまでも本誌スタッフが気に入っているものを掲載しているに過ぎない。逆に紹介されるべきレコードが掲載されていないこともあるだろう。決してそのレコードが悪いわけではなく、ただ個人的に目に止まらなかっただけだったり、聴いても印象に残らなかっただけの理由だ。そのため結果的に片寄った選出になってしまっているが、良いと思えないレコードを無理して良い評価を与えて紹介しても意味ないし、そんなレビューはつまらない。もちろん世界中には膨大なレコードが存在するのだから、全てを紹介するなんて無理な話だ。

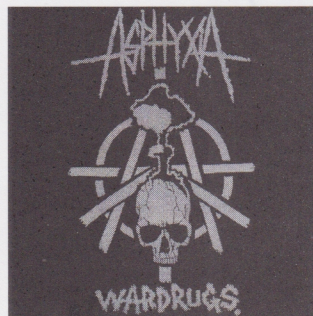
とにかく自分の耳や目で確かめ、自分自身の判断基準から善し悪しを決めてほしい。あくまでもレビューはライターの主観に過ぎず、その意見が全てではないのだ。

※少数プレスのため、既に売り切れているレコードもあるかもしれません。あらかじめご了承下さい。

ABRAHAM CROSS
『Peace can't Combine』12"LP
Crust War(MCR Company 157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN)

否定しようのないくらいDOOM的なクラストコアである。DOOMやEXTREME NOISE TERRORが解散、方向転換してしまった現在において、このクラスティーズが真のクラストコアを伝承する唯一のバンド、という見方もできるのではないだろうか。ノイジーであり、良い意味で汚いヘヴィなギターや絞りきった濁声ヴォーカルは、上記バンドに劣らない程の理想的且つ極上クラストコア魂全快。未発表音源や『Tokyo Crusties EP』等含む貴重な音源を収録したトータル・レイジング・クラストコアである。最近復活したので東京のクラストコア・シーン、いやハードコア・シーン全体を揺れ動かす存在になっていくはずだ。

ALLEGIANCE
『Here Today...』CD
MCR Company(157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN)

アメリカのGMMからのリリース予定であったが、都合によりようやくMCRから陽の目を見る形となった。カナダと日本のパンクスで構成されていて、80年代のUKハードコア・パンクを展開。馴染みやすいメロディ・ラインはストリート感覚というより、色気を出さない裏通り的感覚によって心を打つ。自分達の言いたいことの矛先も背伸びをして国や政治に向けるのではなく、自分達を含めた身の周りにいるパンクスの"在り方"を歌い、いろんな意味で肩の力抜いたリアリティのあるパンクロックなのだ。気取った言葉も不要。心底パンクロックを愛する者に伝える真のパンクスのためのパンクロックであり、決して過去のものではない。

AMDI PETERSENS ARME
『Blood Ser Mere Virkeligt Up Da Film』7"EP
Havoc Records(P.O.BOX 8585 Minneapolis, MN 55408 USA)

世界最強のパンク・レコード・コレクターであり、80年代ハードコアのマニアでもあるFelixの鋭い聴覚には、毎度感服させられる。世界中のクールなバンドを見つけだしては、自らのレーベルからリリースしてしまうのだから、コ レクターとしては最高だろう。このバンドはコペンハーゲンのDIYバンドであり、初期BLACK FLAGを思わせる。以前はYOUTH BRIGADEといった初期Dischord風だったらしく、80年代前期USハードコアを現在に蘇らせたかのようだ。乾ききった音でよりシンプルに、よりハードにキメたハードコアは、グラインドコアを通過した今風のバンドを聴き慣れた私にとって新鮮味がある。

ASPHYXIA
『Wardrugs』7"EP
Crust War(MCR Company 157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN)

敵は同じであるはずなのに音楽スタイルをジャンルとして区切ってしまった結果、現在のハードコア・シーンは分離してしまった。ハードコアの核ってそんなに軟派なものなのか? 10年程前に活動していたASPHYXIAのメンバーが進んだ道は様々であるとはいえ、元々ひとつであったことを証明しているように思う。これがハードコアなのだ。それ程前にこんなバンドがいたことに驚きつつ、短命に終わってしまったことが悔やまれるが、この本当に貴重な音源から当時の大阪クラストコア・シーンの夜明けを感じとって震えるようではないか。音質の善し悪しは関係ない。まずは彼等の功績を讃えよう。そしてCrust Warに感謝。

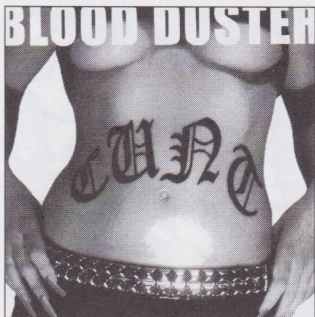
AVULSION
『Prince of a Thousand Enemies』7"EP
Impatience Or Indifference Records (3201 3rd St, San Francisco, CA 94124 USA)

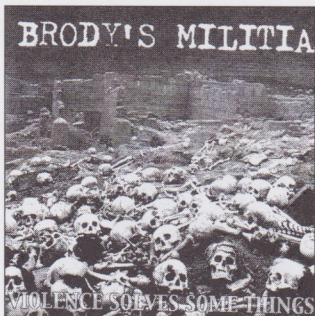
OJ以来の悪名高い殺人マシンという触れ込みに、思わず苦笑してしまった。たしかに残虐性の極めて高いグラインドコアであり、その例えに誰もが納得するはずだ。今までのAVULSIONの場合は、ギターのMattが以前やっていたSLAVE STATEの方が恐ろしいまでの冷酷且つ生々しい暴力的な音に驚かされたし、格差も感じていた。しかし、今回展開するグラインドコアは同等の音を吐き出しているのだ。聴いた者全てが殺人級の爆裂音に終始震えるであろう。この喜ぶべき復活作は、最高傑作に相応しい名盤である。サムライ趣味がにじみ出ているジャケットで、思わず共感というか興味深く手に取ってしまうはずだ。

BASSAIUM
『Be Addicted to Suffering Pain』CD
Ritual Records
(Ikebukuro Wakabayashi Bldg 5F 2-16-19 Mejiro Toshima-ku, Tokyo 171-0031 JAPAN)

日本において恐らく最も活動的なデスメタルだろう。結成してそれ程期間は経っていないが、特定のジャンルに収まることなく様々なバンドと共演した結果、轟音を求めるあらゆるリスナーを頷かせる力量は上がる一方だ。ハードコア・シーンからの指示も高かった様式化する前のデスメタルとしての魅力があり、もしかすると昔のDEICIDEやMORBID ANGEL以上にデスメタルらしさのあるバンドなのかもしれない。フロントマンがヴォーカルに専念しているのも、ライヴにおける魅力を引き立てているのは間違いないし正解だと思う。また、アンダーグラウンドとオーバーグラウンドを行き来できるバンドとしても貴重な存在だ。

BLOOD DUSTER
『Cunt』CD
Ritual Records
(Ikebukuro Wakabayashi Bldg 5F 2-16-19 Mejiro Toshima-ku, Tokyo 171-0031 JAPAN)

偉い人の嫌いな言葉がオンパレードな、オーストラリアきっての馬鹿野郎共。クソ垂れアティチュードも然りである。だからこそ快感を覚えるというものだ。馬鹿と天才は紙一重であることをこのアルバムで目一杯証明し、全世界を"股"にかけて活動するのはA.C.以来と言えるのではないか。ロックンロールにグラインドコアを一表現として取り入れたノリの良いサウンド・センスは、GORE BEYOND NECROPSYにも通ずる。形にハマった音楽的概念を遥かに超えた、100% Grinding Death Rockという彼等のキャッチコピーに偽り無し。ただふざけてやっているのではなく、実は音楽的に深いことをやっているのだ。

BRODY'S MILITIA
『Violence Solves Some Things』7"EP
Get The Axe Records (P.O.BOX 3019 Oswego, NY 13126 USA)

WWEのスーパースターであるジ・アンダーテイカー(当時はテキサス・レッドという名で出場)のデビュー戦は、テキサス州ダラスで相手がブルーザ・ブロディだったとは有名な話。その偉大なるプロレスラーの名を拝借した、元HELLNATIONのDoug率いるニューバンドである。残念ながらあの独特のブロディの雄叫びは聞けないが、凄まじいハードコア・スラッシュが炸裂し、ブロディがチェーンを振り回して暴れているのを連想させる程格好良い。弾け具合は、どこかパワーヴァイオレンス以降のファストコア周辺の音を感じさせ好感度大。ヘヴィなロックンロール且つパンクなANTI-SEENのカヴァーもマッチしている。

CATTLE DECAPITATION
7"EP
Prono de Accidente(P.O.BOX 460686 Escondido, CA 92046 USA)

この45rpm片面のみのレコードが、某レコード店において他7"EPと同額だったので腑に落ちない気分に陥った。しかし聴いた途端不快感は一掃。とはいっても3曲のみというのは不満ではあるが。このバンドは既に御存じかと思うので詳しく説明しないが、メンバー皆多才であるのがひしひしと伝わってくる。ジャケットからゲボゲボな内臓・病理系と思われそうだが、意外とハードコア的なシンプルさがあり、終始テンションが高い。とはいえ、2nd以降のCARCASSのようなクランチ・スラッシュ満載のグラインドコア。濁声だけどスペイン語による巻舌ははっきりと聴こえ、それが手伝ってかBRUJERIAを思い出した。

CAUSTIC CHRIST
7"EP
Havoc Records(P.O.BOX 8585 Minneapolis, MN 55408 USA)

新たなハードコアを追求するということで、偉大なるAUS ROTTENが選んだ解散という決断は結果的に良い方向へ向かわせたと、誰もがこの激クールなレコードを聴いて感じたと思う。そのうちのメンバー2人とSUBMACHINE、REACTのメンバーを加え、スウェディッシュ・ヘヴィ・クラストコアを展開した最強のニューバンドがコレ。ポジティヴな音楽的姿勢が伺えるだろう。勢いのあるバタバタした感じと、上記タイプのバンドより明るい感じが80年代中期、つまりクロスオーヴァー期のアメリカン・ハードコア的な要素を感じ取ることができる。でもメタル臭さはほとんどナシ。21世紀のアメリカン・ハードコアの展望も明るい。

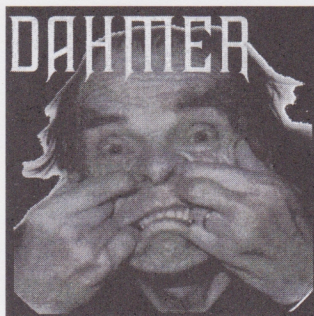
CIRIL / ARMISTICE
split12"LP
Know Records(P.O.BOX 90576 Long beach, CA 90809 USA)

両者の共通点は間違いなくダーティーなパンク・ロックである。少々前にリリースされたものだが、個人的に結構聴きこみ愛着のあるレコードなので、あえて紹介。前者は今年1stアルバムを同レーベルよりリリース。実はこのレコードの曲は全て収録している。CHRISTIAN DEATH的というか、影のあるドゥーミィーなパンクロック。後者ARMISTICEは言わずもがなポリティカル・ハードコアである。CIRILの存在を忘れさせてしまう程スラッシュ炸裂の好音源なのだ。UKだけでなくUSちっくな部分もあるのがミソ。話題にもならなかったレコードだけどそれがどうした。個人的に爆音で聴きたいマスト・アイテム。

CORRUPTED / CRIPPLE BASTARDS
split 7"EP
H.G.Fact
(105 Nakano Shinbashi-M,2-7-15 Yayoi-cho,Nakano-ku,Tokyo 164-0013 JAPAN)

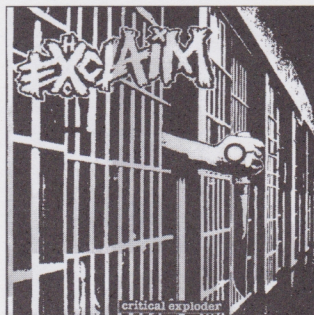
CORRUPTED史上最速(?)のビートによりスタートし、良い意味で期待を裏切られつつ少々驚かされた。初っぱなのHELLCHILDを彷彿させるミッドテンポの激重サウンドは、私的にたいへん好みである。しかし、やはりそこはCORRUPTED。これだけでは終わらず、徐々にスラッジ且つドゥーミィーなハードコアの真価を発揮し、気が付けばすっかり暗黒の地に足を踏み入れる。またしてもいろんな意味で奥の深い音楽性に恐れ入った。イタリアのCRIPPLE BASTARDSは、進化の過程にある90年代以降のグラインドコア・サウンドを炸裂。初期NAPALM DEATHだけがグラインドコアだけではないのだ。

DAHMER / MESRINE
split 7"EP
E.N.D. Records(2255 Ch.Demers St.Nicolas, Quebec G7A 2N3, CANADA)

カナダ出身の冷酷非道なマーダー・グラインド頂上決戦盤であり、両者ともにその筋では知らぬものはいないであろう。人間の優しさ等無縁な超ダーティー・ハードコア・グラインドは、シリアル・キラーを描く上で必須アイテムである。"ミルフォーキーの食人鬼"ジェフリー・ダーマーの名を頂戴した前者は、その非道なる出来事を音で再現しようとしながら、完全に世の中をナメた態度で突き進む。本作最後の曲では彼等流の"お笑い"があり、その辺が単なる馬鹿なマニアで終わらせないセンスを感じさせて良い。片や後者も、負けじとダーティー且つヘヴィなグラインドコアを披露。この種の中では所謂正統的な楽曲といえるが、かなりグレイトな出来。

DESTROYER 666
『Cold Steel... for an Iron Ige』CD
Season Of Mist(24, rue Brandis13005 Marseille, FRANCE)

本誌『FAST』を製作するきっかけともなった衝撃のライヴを体験し、完全にD666症に侵されてしまった私にとって、この新作は聴く前から悪いはずがないと決まっていた。案の定、聴いてみると期待以上の出来に震えが止まらない。初期ブラック・スラッシュを好み、徹底的にアンチキリストを訴え続ける彼等を前に、レビューすることすら危ぶまれる。あえて注文をつけるとすれば、デスメタル系レーベルからのリリースのため、リスナーを限定しかねないということ。あとはもう彼等の訴えに耳を傾け、ファシストに対して戦うのみである。安易にジャンルを限定しては100%彼等の魅力は理解できない。重要なのは訴えと姿勢である。

EXCLAIM
『Critical Exploder』12"LP
Sound Pollution(P.O.BOX 17742 Covington, KY 41017 USA)

本誌を手に取ってくれた人には何の説明も不要だろう。激烈ファスト・ハードコアであることは変わらないし、パワーヴァイオレンスを超えた超クレイジーなハードコアである。ノイズ度が増して、狂気溢れるぶっ壊れサウンドは更に鋭く磨きをかけ、破壊的にハードコアを突き進めている。殺伐とした姿を写し出し、速さ、それも半端じゃない激速サウンドに比重を置いた、本当の意味でのハードコアの究極形態にまた一歩近付いた。ライヴに匹敵するハイテンションも良い。あえてSLIGHT SLAPPERS、FUCK ON THE BEACHに次ぐ東京のクレイジー・ファストコアという言い方をさせてもらうが、キレっぷりは全く劣っていない。

EXTERMINATE
『理想と現実』CD
MCR Company(157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN)

名古屋を拠点に活動中で、ライヴでのステージングが一際激しいゆえに話題先行した感は否定できないが、その実力の真偽はこの1stを聴けば答えが出る。元ORDERとREALITY CRISISのメンバーによって結成されたらしく、80年代の日本のハードコアを感じさせる危険極まりないスタイルをぶちまけている。世間体ばかり気にしてリアリティのない歌詞を並べているだけのファッション/ポーザー・バンドと違って、自分達の目の前にある疑問や不満、そして怒りを音とともに吐き出しているからこそ本物だと確信する。ハードコアとはこういうものだと改めて気付かせてくれるはずだ。真のハードコア・ファンに捧げる一枚。

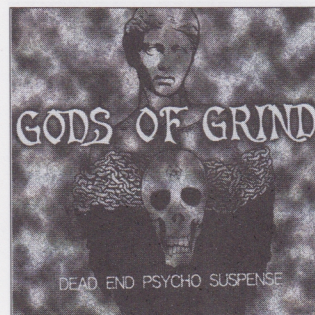
FREEBASE
『My Life My Rules』CD
Hardboiled(Muhlenstr. 823552 Lubeck, Germany)

KNUCKLE DUST等のメタリック・ハードコアと同等に語られるUKバンドだが、活動歴を遡るとFREEBASEは明らかに別格。AUS ROTTENやHUMAN ERROR等ポリティカル・バンドが多数収録されたCONFLICTのトリビュート盤に参加(しかも1曲目)したり、先頃『MAXIMUM ROCKNROLL』にレビューが掲載されていたのも、彼等が単なる流行のメタリック・ハードコアとは違うことを意味する。あくまでもハードコアにこだわり、MADBALL辺りを彷彿させるオールドスクールな直線的音を、より低音域を重視したブルータルな仕上がりにしている。この暗さはUKならではといえるし、アメリカのバンドには出せない音だ。

THE FUTURES
『Electric Wave from The Under World』CD
MCR Company(157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN)

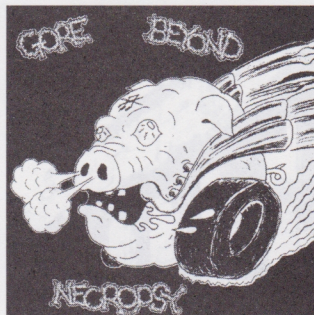
活動的なバンドなので知らぬ者はいないでしょう。まず特定のジャンルにカテゴリーするのは難しい。このような場で説明する便宜上ハードコアと言いたいが、従来のハードコア・スタイルから大きく飛躍したサウンドからは、バンド名が示す通り"未来"を感じさせる全く新しい姿がある。ハードコアを聴いてハードコアを演奏することを否定はしないが、この音からは他のスタイルを吸収したからこそ生まれた斬新さを感じるのだ。今は特異な存在とされるかもしれないが、数多く存在するバンドの中に半永久的に埋まることはない。メディアにより作られた"最新"の音楽ではなく、ミュージシャン側が生んだ本当の意味での"最新"音楽だと思う。

GATE
『Soon to Be Sosomized』7"EP
Bad People Records(P.O.BOX 480931 Denver, C0 80248-0931)

スピード・フリークスにとって技術面は二の次であって、まずは勢い任せのスピードが大事だと思う。しかしこの栃木のグレイトなGATEは、両方とも兼ね備えていてグッド。センスを技術でカヴァーすることなく、バランス良く二つの力がぶつかりあって、最高の状態での演奏を聴かせてくれるのだ。不協和音を撒き散らし、グラインドコアから一歩踏み出したDISCORDANCE AXISやCRYPTOPSYの流れにある、フリーミュージックも含んだ"先"を行く音楽。つまり、型にハマった事をやっていないからこそグレイトであり、面白く、そしてあくまでもヘヴィだから良いと感じるのだ。ロゴやアートワークから一概に判断してはいかん。

GODS OF GRIND
『Dead End Psycho Suspense』CDR

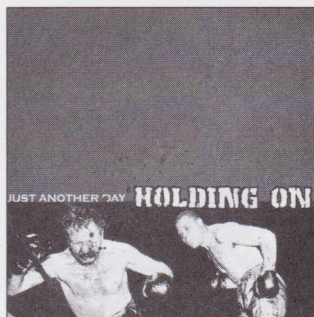
意外と生息数の少ない初期グラインドコア・スタイルを徹底的に追求した長野出身のバンドで、地元シーンでの活躍は東京に住んでいる者にも伝わってくる程勢力的である。巷では長野のDISCORDANCE AXISという異名があるほどエクストリームに満ちたグラインドコアを展開し、音数の多い強力なドラミングを柱に疾走する。全体的にグラインドコアの醍醐味がたっぷりと含まれつつも、クランチのある箇所における精度は楽曲能力の高さを垣間見ることができるはずだ。最近のグラインドコアはメタルの中で語られるようなキチッとした作りが多い中で、衝動的な音楽性はハードコアならではであるし、パンキッシュでもある。

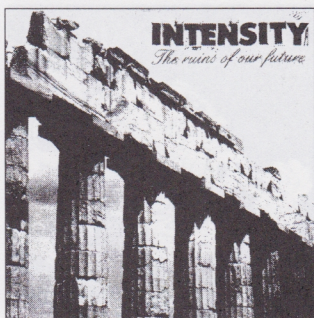
GORE BEYOND NECROPSY
『Fullthrottle Chaos Grind Machine』7"EP
Blurred Records (482-1 Naka,Kambara,Ihara,Shizuoka 421-3213 JAPAN)

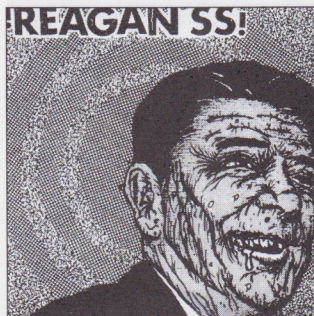
異論はあるかもしれないが、私としてはレコードで聴けるゴア・ビヨンドと、ライヴにおけるゴア・ビヨンドでは良い意味で違う印象を受ける。ノイジーなロックンロールでありつつ基本路線はグラインドコアであり、音源に関しては常に最狂の内容を聴かせてくれる。今回は特にMOTORHEADを意識をしたかは分からないが、ロックンロール全開であり、要所を押さえたブラスト全開のグラインドコア・パートも良い。ライヴはそれを更に超えた、期待以上のクレイジーな出来であるのは言うまでもなく、誰もが毎度満足しているはずだ。バンド名から判断しているのか、彼等に対して間違った認識をしている一般音楽誌には遺憾である。

HELLNATION
『Thrash Wave』CD
Sound Pollution (P.O.BOX 17742,Covington, KY 41017 USA)

近年リリースされた作品をまとめたディスコグラフィー的作品で、全世界のスピード・フリークスが彼等の音楽性に狂喜するであろう。一切の迷いを感じさせないウルトラ・ハイ・スピードによって、ハードコアに絶対的不可欠なメッセージ性を十二分に引き立てるだけでなく、体全体で表現されたエネルギーの発散はハードコアの本質的な部分を感じさせる。98年の日本ツアーに合わせて製作された日本の最重要バンドのカヴァー集や、様々な論議を呼んだ『At War With Emo』等話題の多い作品が列ねる。それらを再編集しリマスターを施して月日の経過を感じさせない狂気のサウンドが蘇り、瞬く間に圧倒させられる。

HOLDING ON
『Just Another Day』12"LP
Havoc / THD Records / 1% Records

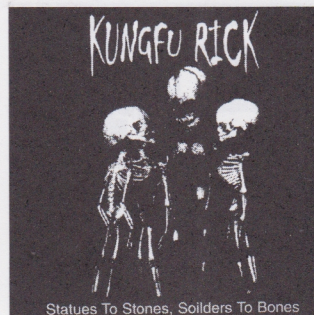
メンバーの年齢的にリアルタイムで体験していないと思うが、80年代末期の最も熱かった時代のニューヨークを中心に存在したバンド達を彷彿させる。所謂初期Revelationからリリースされていたようなバンドのことである。しかし、まずハッキリ言っておきたいのはメタリック路線ではない。皆が大好きなモッシュとシンガロングするためのグレイト・ナンバーに溢れ、鬼速いというよりもライヴ感のあるノリの良いスラッシュ・ハードコアである。80年代をこよなく愛するHavocがリリースしたも納得のいく、全てが本気モード全開のハードコア。彼等の場合も例にもれず、音だけで判断できないバンドなのは言うまでもない。

INSULT / RUIDO
split7"EP
Know Records (P.O.BOX 90576 Long beach, CA 90809 USA)

少々古い作品だが良いスプリット盤なので御勧めを。言わずと知れたボストンの変態野郎ANAL CUNTのSethをフューチャーした、ブルータル・ハードコアのINSULT。ヴォーカルの絶叫はANAL CUNTを連想してしまうが、ANAL CUNTのような変態グラインドではなく、結構まとも(?)なボストンならではのパワフル路線を行くハードコア。一方後者は、FUCK ON THE BEACHとスプリット盤を出したバンドとしても知られているRUIDO。よりファストでヘヴィなグラインドコアな印象を与えているが、やはり彼等もLOS CRUDOSを彷彿させるLAのラティーノ・ハードコア・パンクというべきだろう。

INTENSITY
『The Ruins of Our Future』12"LP
Deranged Records(P.O.BOX 543 STN.P Toronto On. M5S-2T1 CANADA)

スウェディッシュ、イングリッシュ、スパニッシュの3言語で歌うという、実にユニークなことをやっているけど全く違和感なし。80年代ユースクルー・ハードコア・スタイルという形容が正しいと思う程、スタイリッシュ且つハイスピードで展開していく。ライヴは凄いという噂で、これを聴けば納得いく程つかみ易いノリの良さ。いくつか曲がフェイドアウトしていくのはマイナスだが、欧州で絶大な人気のあるニュースクール/メロディック・デスメタル風の美しいメロディを、所々自然と聴かせるのは注目すべき最良点である。アートワークにもその趣味が表れているように思う。ちなみにこのDeranged盤のジャケットの色は、数色存在する。

JOHN BROWNS ARMY / REAGAN SS
split 7"EP
Gloom Records(P.O.BOX 14253, Albany NY 12212 USA)

アルバニー出身ハードコアの通称JBAと、ライヴでの凄まじさには定評のあるREAGAN SSとのスプリット盤。前者JBAは、CURTAINRAILのレコードの片面だったことが有名ではないだろうか。アルバニーといえばハードコアとメタルの融合が有名な地になった感もあるけど、はっきりとそのような雰囲気には呑まれていないものの、パワフルさと極悪具合では影響を感じさせる。一方の後者は人気急上昇中のバンドであり、80年代の影響を良い形でさらけ出している。一見シンプルそうで実は奥が深いという、聴けば聴く程味が出る一筋縄では行かない楽曲群は、本拠地LAの音楽的な幅の広さによるものなのか? 名前もパンクで好き。

KRIGSHOT
『Orebromangel』12"LP
Sound Pollution(P.O.BOX 17742 Covington, KY 41017 USA)

在籍メンバーが、日本盤をリリースし来日も果たしたNASUMにも参加しているので、メタル系を含む幅広い層に知られるようになった感がある。とはいえ、本隊KRIGSHOTはグラインドコア成分ゼロなのは言うまでもない。所謂スウェディッシュ・ハードコアを体言した正真正銘ハードコアであり、細かく砕け散ったノイジーなサウンドが炸裂する。重量感もタップリ。そういった意味ではNASUMとは違った極限を追求したサウンドであり、マシンガンのごとき攻撃の手を一切緩めず、呼吸をする暇さえ与えない。ちなみにMEANWHILEのメンバーも参加、例によって毎度お馴染みのSound Pollutionよりリリース。

KUNGFU RICK
『Statues to Stones, Soilders to Bones』7"EP
Gloom Records(P.O.BOX 14253, Albany NY 12212 USA)

全体的に感じられる音圧と、デスメタル系特有のブルータルな音色によってメタル的印象を与えてしまうが、決して100%メタルではない。ヴォーカルのデス・ブラックメタル系特有のサタニックなヴォーカル・スタイルが、よりメタルな雰囲気を作り出しているが、むしろハードコアによる暗黒世界の表現である。また複雑に曲が展開するとはいえ、メタル様式に収まらないハードコア然とした箇所が多く、音楽姿勢そのものはあくまでもハードコアであるのが重要だ。最も彼等をメタルとして認識している人はいないであろう。一見マイナスに捉えられそうなバタバタしたドラムも、良い意味でハードコア的な疾走感を生んでいる気もする。

LITTLE BASTERDS
『Greed Slaves』7"EP
Dewa Records (89-11 Ishinada Tonojima Tsuruoka, Yamagata 997-0815 JAPAN)

様々な形で音源を発表していたし、本作品が既に話題になっていることもあって御存じかと思う。埼玉出身のハードコアの1stEP。裏ジャケットにある"Grind Crusty"というコメントは、全く偽りのなりクラスト色の濃いロウな展開がある。ある意味、PeacevilleやEarache(いづれも初期)といった1980年代後半のUK・ハードコアを彷彿とさせるダークさ、ヘヴィさを兼ね備えている点において、グラインドコアなる言葉で持てはやされる前のハードコアを感じた。音の持つ威力は圧倒的にグラインドコアに勝るものはないので、ハードコアが本来持っていた姿勢を感じるクラストコアとの融合は自然的である。

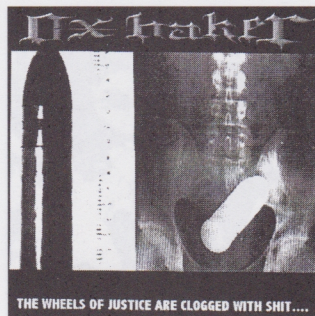
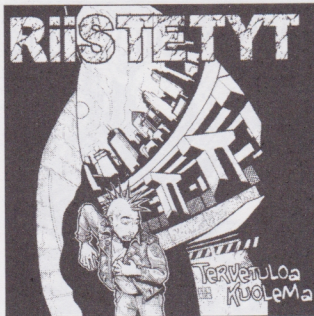
MACABRE / CAPITALIST CASUALTIES
split7"EP
D.B.D.Records

意外な組み合わせは、スプリット・レコードの魅力のひとつ。今は属している主要なシーンは違うけど、両者は同じスピリットを持っていたということ。前者は既に発表済の曲で残念だが、アウトテイク・バージョンだから良し。レコード全体の作りが後者のシーンに向けたレコードのような印象を受けるので、新曲じゃなくてもMACABREの代表曲を聴けるという意味でグレイトといえる。後者CAPITALIST CASUALTIESは少しスローダウンした感があり、爆裂するスピードを期待してはいかん。しかしShawnが独特な声で歌い、JeffとMikeが弾くとCAPITARIST節になってしまう。もちろんMaxのドラムも重要。

MUKEKA DI RATO
『Acabar Com Voce』CD
Sound Pollution (P.O.BOX 17742 Covington, KY 41017 USA)

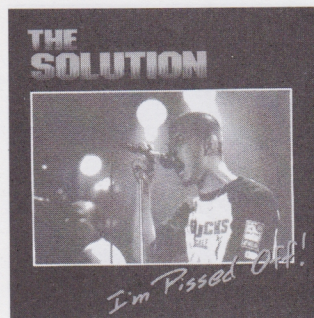
ラテン系ハードコアの再評価の高まる中、真打ち登場といった感じでブラジル本国以外初のリリースとなる3rdアルバム。"本場"ならでは軽快なサウンドでありつつ、尋常ではないエネルギーの発散度数は、憧れているがゆえに真似をする偽称ラテン系バンドとは深みが違う。CRUDOSにも言えたことだが、言葉の意味は全くわからない。しかし"熱さ"は間違いなく伝わってくるのだ。意外とキャッチーな楽曲とトボケたアートワークが微笑ましくもあり、そのギャップと対比するかのごとくシャウトするヴォーカルと、デス・ヴォイス一歩手前のダミ声の掛け合いもまた最高。まだまだブラジルにはクールなバンドが潜んでいる!!!

OX BAKER / HAYMAKER
split7"EP
Deep Six (P.O.BOX 6911 Burbank, CA 91510 USA)

Deep Sixお得意とも言うべきINFEST系爆裂ハードコアによる、最重要スプリット盤である。前者がINFEST〜CAPITALIST CASUALTIES的、後者がNEGATIVE APPROACH以降のヘヴィ系といった感じで、両者同じというわけではないがそれだけブチ切れ具合は半端ではなく、フル・ヴォリュームで聴きたくなるハードコアなのだ。どちらかと言えば、イカレ具合の凄さから前者OX BAKERの方が私的には好みである。後者は今風のカオティック路線がどこか見え隠れしながら、ダーティーなハードコアはSHEER TERRORを思い起こさせてナイス。カナダの次世代有力ハードコアであり今後も要チェック。

RIISTETYT
『Tervetuola Kuolema』7"EP
Havoc Records (P.O.BOX 8585 Minneapolis, MN 55408 USA)

今更説明するのもなんだが、フィンランド語でExploitedを意味する偉大なるハードコアである。まずは叫びながらも滑らかな口調のヴォーカルにより、心地良く聴こえるだろう。波のように流れて行きながら、北欧ならではのドッシリとした重さのあるハードコアで全体を覆い、ギターソロが多少あるとはいえ一言でメタリックなどと言ってはいかん。ただ技術にはしるのではなく、もっと効果的に使っているのだ。実にまとまった内容であり、これを聴いて何も感じない人とは話が合わん(と思う)。Fight Recordsよりライセンスを得てボーナストラックを追加、そしてリミックスしたお得盤である。祝復活!!!

SKITSYSTEM
『Enkel Resa Til Rannstenen』12"LP
Havoc Records (P.O.BOX 8585 Minneapolis, MN 55408 USA)

スウェディッシュ・ハードコア好きで有名なHavocと、スウェーデンのNo Tolerance Recordsとのスプリット・リリースによる、世界中で大人気のスウェディッシュ・ハードコア。ヘヴィなクラスティ・ハードコアで、スカンジナヴィアならではのD-beatは破壊力抜群。NASUM/KRIGSHOTのMieszkoとのプロデュースで、その筋の奇才によって超一流のブルータル・クラスト・サウンドを作り上げながら、更に期待を裏切らないスウェディッシュなダーティー路線も良い。メンバーが元々どのバンドに在籍していたのか毎度話題になるが、サンクスリストを見るとやはり彼等の意外な人の繋がりが見えて面白いのだ。

THE SOLUTION
『I'm Pissed Off』CD
MCR Company (157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN)

Oi/スキンズはメディアに取り上げられることが少ないとはいえ、UNITED'97は知っているだろう。この岐阜を拠点に活動しているTHE SOLUTIONは、そんな有り余る力量を出し切れなかったUNITED'97を母体に結成されたバンドであり、その実力は保証できる。口ずさみたくなる馴染みやすいメロディをやってのけるセンスと、パワフルなルックスとが相俟って、バンドとしての魅力が十分に発揮されている。怒りや訴えを音にそのまま反映させるのではなく、音楽で気持ちを伝えるという意味で非常に哀愁が漂い大人を感じさせる。しかし、下地にあるのはあくまでもパンクロックであるのは間違いないのだ。

SPITTING TEETH
『Leagacy of Cruciality e.p.』7"EP
1-2-3-4 Go!!! Records (716b 47th Ave NE, Seattle WA 98105)

ハードコア好きを自称するのであれば、絶対に聴くことをお薦めするのがSPITTING TEETHである。7"EPというハードコアに絶対不可欠なフォーマットに、パワー、エナジー、スピードというハードコアの3大要素(魅力)を全て惜し気も無く詰め込んだ。NEGATIVE APPROACHを継承するバンドの大本命。彼等がカヴァーしている曲も超伝説的ストレイトエッジ・バンドのPROJECT Xというのが、センス良いし最高ではないか。ボストン～ニューヨーク周辺の音を出しているという説明では不満足かもしれん。しかし、本気でやればこんな音になるのだと思う。非バンダナ系ファスト・ストレイトエッジだ。必須!!!

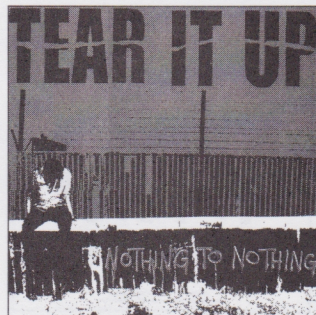
SUICIDE PARTY
『You're All Invited』7"EP
Deadalive Records(P.O.BOX 97 Caldwell, NJ 07006 USA)

最近のDeadaliveの作品は、絶対に外してはならないと確信している。忘れかけていたハードコアの魅力が満載だからだ。このSUICIDE PARTYも例にもれず。その筋では有名な人材が集まってできたバンドという説明は、もはや付加価値にしか過ぎない正真正銘ハードコアである。パワー漲る凄まじい音色であり、パワフルに、そしてシンプルにキメるからこそ凄みも増す。これこそ本物と言えるだろう。素晴らしいセンスの良さは音だけでなく、クールなジャケットにも表れている(近年のジャケットの中でNo.1)。音、アートワークと全てが今年ベスト10に入り、DISCHARGEやPOISON IDEAにも迫る大傑作。

SWARRRM / BLOODRED BACTERIA
splitCD
MCR Company(157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN)

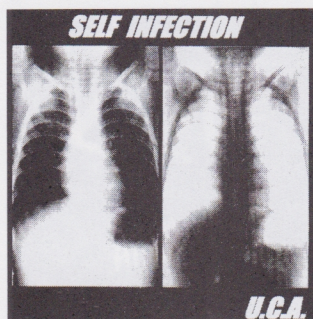
日本のグラインドコア・シーンの中核として全国区で活動するSWARRRMと、グラインド系バンドとして知名度が向上しつつあるドイツのBLOODRED BACTERIAによる超強力グラインドコア・スプリット盤。まず神戸のSWARRRMは美しいピアノ演奏から始まりつつ、欧州のメロディックなデスメタル/ニュースクール、グラインドコア等をカオティックに超越。激しいライヴだけでない一面も見せている。一方のBLOODRED BACTERIAは、デスメタルにドップリと浸かることなくハードコアとしてのグラインドコアを披露。両者ともアンダーグラウンドなレベルでの活動をしているバンドらしい音だ。

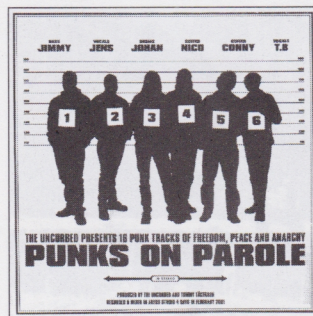
TEAR IT UP
『Nothing to Nothing』12"LP
Deadalive Records(P.O.BOX 97 Caldwell, NJ 07006 USA)

現在のアメリカのハードコア・シーンで、最も勢いを感じさせるニュージャージーの大人気ハードコア・バンドの1stフルレンス。これを聴いて何も感じない者はいないと言い切れる、素直にかっこいいと思える楽曲群。高いテンションをキープしつつ、爆発力のある加速とブチ切れ具合は80年代のハードコア、例えばYOUTH OF TODAY辺りを感じさせながら、単なる焼き直しに終わってないところがこのバンドの凄さであり魅力でもある。影響を受けたバンドを自らのスタイルとして消化したからこそ、聴いたことのあるような親しみやすいメロディが生まれたのだろう。ある意味、アメリカン・ハードコアのスタンダード。

TEAR IT UP / FAST TIMES
split7"EP
Yong Blood Records(217 W.Main St. Ephrata, PA 17522)

ニュージャージーの新進気鋭のハードコア・バンドによるスプリット盤。ネームバリューのある前者TEAR IT UPは、上記アルバムに劣ることのない出来栄えに大満足である。むしろ短期間に集中させて一気に爆発させるという意味では、本作の方が絶対上といえる。楽曲面での劣り等一切ない。後者FAST TIMESは、地元シーンでは結構知名度、人気共に上がっているようだ。女性と思われるヴォーカルが、私としては聴き慣れない声の音域なので、新鮮であり気持ちが良い。ギターとベースも前へ前へと出ようとしながら、各音そのものが主張しようとしている。全体的に違和感なくまとまり、もの凄くパワフルな印象を与えている。

U.B.R.
『Yugoslavia Panic』7"EP
Crust War(MCR Company 157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN)

オリジナル音源は1983年リリースのカセットテープ『Kae's Alternativa』である。これが社会主義国家であった約20年前の旧ユーゴスラヴィアのバンドであるということに驚く。政府によって活動を弾圧された最悪の環境下で、これ程まで破壊的なサウンドをやってしまうとは信じられん。矢継ぎ早に攻め立てる音の洪水は、彼等の置かれていた緊迫した状況がそうさせていたのかもしれない。自分達の生きる道はハードコアでありパンクであると、最も原始的な方法と手段で自分達の主義主張をアピール。そこにはDISCHARGEに迫る研ぎ澄まされた緊張感が収まっている。ぬるま湯に浸かっていては表現不可能な爆裂作。

U.C.A.
『Self Infection』CD
MCR Company(157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN)

80年代の日本のハードコア·シーンの熱気が冷めぬ1991年に結成され、以降様々なスプリット盤等に参加しその勢いは止まることはない。2ndにあたるこのCDからは、出身地である福岡がハードコアを語る上で外すことのできない層の厚さを物語る。語弊であるのを承知で書くが、初期YOUTH OF TODAY並の勢いと狂気を感じるのは恐らく自分だけではないだろうし、3人組とは思えぬ音の厚みとパワーも凄い。エモーショナル且つカオティックな面を時折見せることにより、80年代と90年代を肌で感じたこのバンドならではの独自性として光っている。九州だけでなく全国区で活動してほしい超強力バンド。

UNCURBED
『Punks on Parole』12"LP
Sound Pollution(P.O.BOX 17742 Covington, KY 41017 USA)

MOTORHEADばりのダイナミックな爆走ロックンロールに、ハードコアをブレンドしたスカンジ·ハードコア·パンク。良い曲だからこそ乗るってもんだ。パンク·ロックらしく、ツイン·ヴォーカルによる掛け合いは最強なのは当然だし、特に「Buy Me Out」では超鳥肌もののカッコ良さ。これを聴いて震えないなんておかしい。最高にセンスの良いジャケットに書かれているコメントもグレイト。かっこいいジャケットだから印象に残る、という点でも大成功と言える。これ以上言葉にならない程の大傑作なのだ。サンクス·リストにあのMARDUKの名があり、スウェーデン·シーンが複雑に絡み合っていることがわかるだろう。

UNHOLY GRAVE / SABBAT
split7"EP
The Sky Is Red

誰が想像したであろうこの組み合わせ。音楽性の違いは明解ゆえに、実現はまずあり得ないと思っていたし、想像できたとしても空想の世界に過ぎなかった。これは100%、現在のレコード大量リリース·ラッシュの中に埋もれはしない。何と言ったって、片面は我が国が誇るスラッシュメタル·マスターSABBATだからだ。分かりきっていることだが、絶対にそこらのバンドは比ではないのだ。18年のキャリアは伊達じゃない。対するUNHOLY GRAVEもそのキャリアに押されぬ、ロウなグラインド·ハードコアを炸裂。毎度ネタの豊富さには呆れる程感心させられる。このレコードこそ、スプリット盤の醍醐味満載である。大傑作、且つ名盤。

VITAMIN X
『Down The Drain』CD
Havoc Records(P.O.BOX 8585 Minneapolis, MN 55408 USA)

バンド名からストレイトエッジであることを明確に表し、ポリティカルな姿勢を崩さず音楽に取り組んでいるので、彼等の意思が中途半端でないことを感じるだろう。80年代ユースクルー・ハードコアの人を惹き付けるノリの良さとファストコアの激スピードは、ポリティカルなメッセージをストレートに伝える上で重要な役割を果たす。絶対にハズすことのできないそのメッセージは、各曲に解説文を記載する程大切にしながら、LARMの意思を受け継ぐかのごとく全世界へとアピールしている。結果、全てが本気だからこそ母国オランダだけでなく、昨年テロの標的にされたアメリカの同士にも届いたのだ。ブックレットにある全てのメッセージをチェックしてほしい。

VIVISICK
『Punks were Made Before Sounds』7"EP
Sound Pollution(P.O.BOX 17742 Covington, KY 41017 USA)

定評ある強力なライヴにより今まで多くのバンドを撃破した、御存じ東京ハードコア・シーンの震源VIVISICKである。世間一般的に言われているクロスオーヴァー期のメタリックなスラッシュではなく、OUTOやSYSTEMATIC DEATHといった80年代の日本ならではのハードコア・スラッシュを21世紀へと蘇らせた、そんな感じだ。現在を生きる彼等の音楽は、90年代のパワーヴァイオレンスを通過したバンドだからこそ、我々の心を捕らえたのだと思う。よって懐古主義ではないのだ。振り絞って吐き出した、エナジー溢れシャウトする金切り声も最高。ライヴが良いバンドは、レコードも良い。日本好きのレーベルよりリリース。

WOLFBRIGADE
『Progression / Regression』CD
Havoc Records(P.O.BOX 8585 Minneapolis, MN 55408 USA)

このバンドは言わずと知れたWOLFPACKが前身であり、同名のバイカー・ギャングが存在したために改名せざるを得なかった。慣れ親しんだ名前だっただけに残念である。暗くとも美しいメロディをベースに、スカンジナヴィア流クラストコアで内に秘めた怒りを一気に爆発させる。女性ヴォーカルをフューチャーした曲があったりと、幅のある楽曲群を難無くこなしてしまうのはベテラン勢にしか出せない凄みだろう。クラストコアとグラインドコアが入り交じったシーンで活動、そして交配した結果、暗さだけでなく重さも重要なポイントとなった。その点がSKISTSYSTEM辺りと比較される要因にもなっているのだと思う。

YACOPSAE
『Einstweilige Vernichtung』12"LP
Vulgar Records/Scrotum Records

最近の活動力とレコードのリリース数には目を見張るものがある。このアナログLPはドイツの上記レーベルによるスプリット・リリースで、CD盤はSlap A Ham。"Turbo Thrash"とはSlap A Hamが彼等を形容した言い方だが、なるほど、たしかにレコード針がとんだのかと思う程ストップ&ゴーを多用し、その加速感はHELLNATIONに匹敵する。個人的にはむしろグラインドコアと言ったほうがピンと来る程、ヘヴィで曲の輪郭はハッキリとしているように思うし、緩急するタイミングはSPAZZ以降のパワーバイオレンスなグラインドコアである。ドイツ語なのでわからないが、ポリティカルなメッセージあり。

V.A.
『Collapsed -Ritual Records Sampler-』CD
Ritual Records
(Ikebukuro Wakabayashi Bldg 5F 2-16-19 Mejiro Toshima-ku, Tokyo 171-0031 JAPAN)

元々HELLCHILDをリリースするためにスタートしたRitual Recordsは、今や世界レベルで活動する轟音バンドを発掘、サポートをし続ける日本が誇るレーベルとなった。バックグラウンドはメタルとしながら、ハードコアを網羅したエクストリーム・サウンドは21世紀の新たな音楽スタイルとして確立。レーベルとしての方向性を明確に示した2度来日したSOILENT GREENを筆頭に、NASUM、SKINLESS、ORIGIN、BENUMB、CEPHALIC CARNAGE、DISASSOCIATEといったアンダーグラウンド・シーンと密接な繋がりのあるバンドを多数収録している。29曲収録の2枚組激安サンプラー。

V.A.
『Meaningful Consolidation.2. And Jungle Unity.3』7"EP
Blurred Records / Fun At Home Records

「Speed Star Collection!」なるサブ・タイトルから察する通り、まさにその名に相応しい最速の4バンドが参加している。どのバンドも自らの音楽を象徴するかのような最狂ナンバーを提供し、単なるコンピレーションの域を遥かに超えた日本の最重要レコードと化した。にわか仕込みの流行且つ軟派なバンドとは、センスとパワーにおいてレベルの差が歴然としているのは言う間でもない。ライヴにおける凄さが滲み出た結果であり、ライヴを続けているからこそ得た成果なのだと思う。同じスピードを重視したバンドであっても、感性と表現の違いからここまで違うものができるのかと、各バンドに感心させられるだろう。

V.A.
『Thrash of The Titans』12"LP
Know Records(P.O.BOX 90576 Long beach, CA 90809 USA)

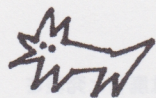
レーベル側の意図としては、80年代クロスオーヴァーのリバイバルのようだ。ジャケットもACCUSEDを手掛けたGaitherを起用、すっかり気分は80年代である。タイトルは、有名なスラッシュメタルのツアーをパロったかは不明。しかし参加バンドに誰もが震えるだろう。DS-13に始まって、最後は元CRUDOSのメンバー在籍のTRAGATELO。個人的にはLACK OF INTERESTとSTRONG INTENTIONが同じレコードに収まっていることが、最重要なポイント。意外なところではA.C.とHIRAX、日本からはFUCK ON THE BEACHとBEYOND DESCRIPTIONが参加。ちなみにD.R.I.も収録してるが、相変わらず昔の曲に頼ってます。

V.A.
『Wizards of Gore -A Tribute to Impetigo-』12"LP
Displeased Records(Ronde Tocht 7d NL-1507 CC Zaandam HOLLAND)

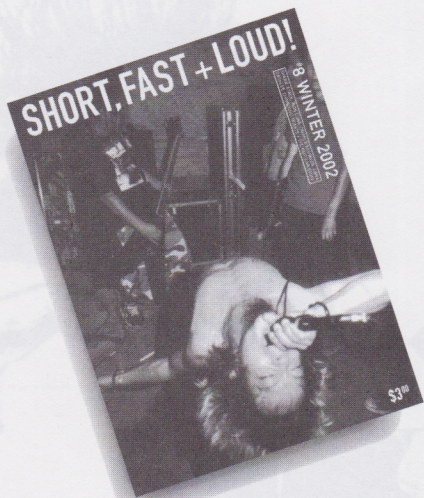
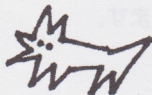
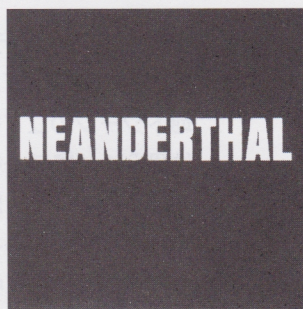
当時のデスメタル系ファンジンには常連のように記事や広告が掲載され、デスメタル自体アンダーグラウンドな存在であった時期にもかかわらず、粗雑な音から更に地下を突き進むバンドとしてカリスマ視されていたIMPETIGO。ここ数年再評価が高まり、実に豪華なトリビュート盤の完成といったところ。日本を含む世界中のデス/グラインド系バンドが集結。メタル度の高いバンドからハードコア色の強いバンドに至るまで、知名度問わずこれだけのメンツを集めたレコードは本当に奇跡的。どのバンドも"らしさ"を損なわない聴きごたえのある内容であり、ゴア・グラインドを語る上で絶対はずしてはならない偉大なトリビュート盤である。

FEATURE

SLAP A HAM RECORDS

ハードコア、グラインドコア、クラストコア、デスメタル等々を網羅したヴァイオレンスなサウンドを次々と輩出し、90年代地下シーンの立て役者となっていたSLAP A HAMのレコードは恐らく一家に一枚、いや地下ハードコア･ファンであれば数枚は所有していると思う。しかし皆も御存じと思うが、残念ながら今年になってレーベルとしての運営をストップさせてしまった。今回は、今更ながらそんなSLAP A HAMに敬意を払って、私的に大好きな初期の作品を紹介します。

FEATURE

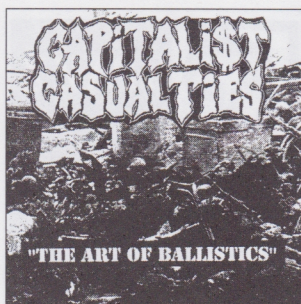
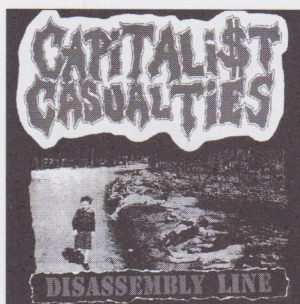
SLAP A HAMとしてはここ数年、莫大な赤字に悩まされていたようで、このままレーベルを継続させるのは不可能だと判断し、OTOPHOBIAのCDを最後にリタイアという道へ踏み切ったようだ。後期SLAP A HAMは所謂100%DIYレーベルではなかったと思うが、このシーンでバンドなりレーベルを続けていくのは困難であることを、改めて証明したかのような出来事でありショッキングである。実際問題、バンドなりレーベルをやっていても売り上げ分の回収は難しいので、結果的に収入なんてほとんど無いに等しい。そのような意味で、このシーンの中心にいて誰もが一目置いていた、大御所SLAP A HAMがリタイアするというのは正直悲しい反面、困惑したのも事実だ。

また、ファンとしてはSLAP A HAMが無くなってしまうことが残念であるのと、レーベル・オーナーである秀才Chris Dodgeの今後が気になるところだが、リタイアするのはあくまでもポジティヴに考えているようだ。それを聞くと少しは安心する。

#1.5 INFEST / P.H.C.
split 8" flexi

#4 NEANDERTHAL『Fighting Music』
7"EP

今後のSLAP A HAMについて。一時は廃刊と発表されていた激烈ハードコア・ファンジン『SHORT, FAST + LOUD!』は、Jeff RobinsonとAthena Kautschが運営しているSIX WEEKSがその意思を受け継いで、来年には#9を発行する予定だ。ちなみに現時点での最新号#8の表紙は日本が世界に誇るヘヴィロック・マスターHELLCHILD。バンド側、またはマネージメントを担当しているRITUAL RECORDSとしては、なぜヘルチャが表紙なんだ? といった感じのようだが、彼等の音楽性と活動歴を考えると極自然といえる。その写真はヘルチャらしいアグレッシヴなライヴを写し出していて非常にカッコ良い。復活を願う!!!

リリースが予定されていたSHANK、LANA DAGALES、IRON LUNG、CONGA FURYのレコードについてはDEEP SIX、625、SIX WEEKSがそれぞれリリースする模様。DEEP SIX / 625からSHANKのLPが、CONGA FURYはSIX WEEKSがリリースする。また、SLAP A HAMは膨大なディストロ・カタログを抱えているので、当面はメイル・オーダーでSLAP A HAMのバック・ナンバーや、世界中の激烈ハードコアのレコードを手に入れることができる。気になった人は是非利用してください。

『SHORT, FAST + LOUD!』#9

#5 STIKKY
『Cuddle』7"EP

#8 CAPITALIST CASUALTIES
『The Art of Ballistics』7"EP

#10 CAPITALIST CASUALTIES
『Disassembly Line』LP/CS/CD

#7 V.A.
『Bllleeeeaaaauuurrrrgghhh!-The Record』7"EP

#9 CROSSED OUT
7"EP

#11 NO COMMENT
『Downsided』7"EP

自分が聴きたいレコードを出したいという理由で、1989年にChris DodgeによってSLAP A HAMはスタートした。そしてあくまでもリリースするバンドはパンク。一般的評価が低く、ある意味正当な評価をされていないバンドのリリースを目的とし、もちろん、Chris自身が好きなバンドであるのは必須条件だ。

＃1はMAN IS THE BASTARDの前身バンドといえるPHCと、東海岸のマッチョテイストに通じるファスト・サウンドがクールなINFESTのスプリット盤で、フォーマットもナイスな8"Flexi。この頃の作品は各1000枚プレスである。ちなみにこのレコードも1000枚プレスで、イエローとブラックの2色印刷のジャケットにブルー・ヴィニール。しかし、この＃1のスプリット盤は多くのブート盤が存在したので、後にカタログ・ナンバー＃1.5で7"EPにフォーマットを変えて再発している。

＃2はChrisお気に入りのMELVINS。後のレーベル・イメージから考えると違和感のあるリリースといえる。フォーマットは8"Flexiで3回各1000枚プレス。1stが通称"Buzz"カヴァー、2ndが"Dale"カヴァー、3rdが"Lori"カヴァーとプレスごとにジャケット、ヴィニール・カラーが異なる。

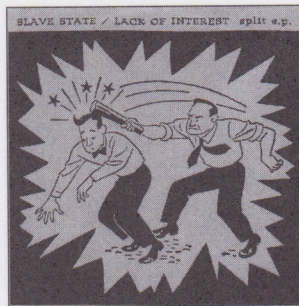
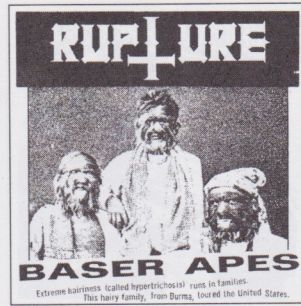
＃3はNOFXのFat Mikeが運営するFAT WRECKの看板バンドとして有名なNO USE FOR A NAME。これも今考えると意外な選出だが、ChrisがNO USE FOR A NAMEのオリジナルメンバーであることを考えると違和感はないだろう。また、この頃のChrisはFAT WRECKのスタッフとしての顔を持っていて、そういう意味から考えると音は違うが、SLAP A HAMとFAT WRECKにはトボけたアートワークに共通性が見出せて面白い。ちなみに数年前、ボウリングをやっているというFat Mikeを含むFAT WRECKのスタッフ全員の写真が初期『EAT MAGAZINE』に掲載されていたのだが、その中にChrisが一際目立って写っていた。また、Chrisのナイスな顔を表紙に使用し、インタビューを掲載したFAT WRECKが発行するメイルオーダー・カタログもあった。ちなみに、このレコードは計4000枚プレスされて、1st2000枚はグレイ・カヴァー。2nd2000枚はパープル・カヴァーで、内41枚ヴィニール・カラーが異なるものが存在する。

MAN IS THE BASTARDのEric Woodと、INFESTのMat DominoによるプロジェクトNEANDERTHALの唯一の音源が＃4。今更説明するのもなんだが、このEric WoodがMAN IS THE BASTARDを形容する造語"パワーヴァイオレンス"の生みの親。INFEST、

#12 V.A.
『Son of Bllleeeeaaaauuurrrrgghhh!』7"EP

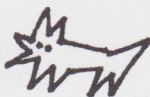
#16 SPAZZ
7"EP

#18 CAPITALIST CASUALTIES
『Raised Ignorant』7"EP

#15 MONASTERY / ANARCHUS
split LP/CS/CD

#17 LACK OF INTEREST / SLAVE STATE
split 7"EP

#19 RUPTURE
『Baser Apes』7"EP

NO COMMENT、CROSSED OUT、SPAZZ、CAPITALIST CASUALTIES、LACK OF INTERESTといった西海岸で活動していた一部のバンドを示す言葉となったのは言うまでもない。1stプレスは1000枚のブラック・ヴィニール。2ndプレスは200枚ブラック、100枚パープル・ヴィニール。

＃5は一応、未だに解散していないことになっているSTIKKYのOFF THE DISKから500枚リリースされていた7"EPの再発盤。一連のファストコアの元祖ともいえるポンコツ・スラッシュ・ハードコアが心地良い。2000枚プレスで、内13枚がブルー・スプラッター、43枚がイエロー・スプラッター・ヴィニール。話は前後するが、オリジナル盤のリリース前にLOOK OUTとMANIAC EARSによるLPが存在するが、後者MANIAC EARSにはリップオフされたと、後にChrisは公言している。怪しいMANIAC EARS盤を買うなら、ボーナストラック入りSOUND POLLUTIONから再発されている盤をお薦めします。

＃6はMELVINS以上に意外な選出のFU MANCHU。今ではメジャー・レーベルとの取り引きもある程、人気、知名度共に一般的評価は高いが、その分、地下シーンでの評価は下がる一方だ。1000枚プレスだが、他のレコードのように遊び心の無いリリース。

本当は200〜300バンド集めたコンピレーション盤を作りたかったとChrisは言うが、それでもこれまでのレコード概念を超えた驚異の41バンド計64曲収録した＃7。収録されているバンドから、当時地下シーンがどのようになっていたのか、またどんな繋がりがあったのか見えてきて面白い。その意外性を確認して欲しい。私的にはEXTREME NOISE TERRORとANAL CUNT、INFEST、ATROCITY、MINDROT、IMPETIGOが同じレコード上にあるのが興味深い。ちなみに製作にたいへん苦労したため、これを作った後2度とこんなレコードは作らないとChrisは言っていたが、結局この後も2枚同様のシリーズでリリースしている。

いよいよパワーヴァイオレンスのというか、SLAP A HAMの本領発揮といった感じの名盤＃8。しかも、後にこの地下シーンで大人気バンドとなるCAPITALIST CASUALTIESの1stEPである。INFESTとは違った力任せのスピーディーなヘヴィ・ハードコアに、誰もが狂喜したことであろう。後に＃10のCD盤に収録されたようだが、個人的にはこのジャケットは好きなので、絶対このレコードは所有しておき

たいところ。SLAP A HAMの中でも3本の指に入る程好きな1枚。1500枚プレス。

#9は伝説のCROSSED OUTの1stEP。従来のハードコアやグラインドコアにはない壊れ具合は、狂気に満ちた新たなハードコアの誕生を感じさせた。ライヴをあまりやっていなかったので、どんな記録でも有り難いのだ。1000枚プレスのみ。近年、#55でCROSSED OUTのディスコグラフィー盤としてCDとLPがリリースされている。作りがしっかりとしていて、ブックレットも見ごたえありなので必須。

パワーヴァイオレンスを語る上で、絶対外してならないCAPITALIST CASUALTIESの1stアルバムが#10である。名盤。ハードコアのエナジーとパワーが最高潮に達し、それをスピードにのせて暴れまわるという、パワーヴァイオレンスを絵に書いたようなサウンドなのだ。これを聴いて何も感じなかった人は、即効ハードコア・ファンであることを取り消すべき。いや、嫌いな人はいないだろ? LP盤は1stプレス1000枚。カセット盤は1stプレス500枚のみ。CD盤は3回プレスし各1000枚。

#11は言わずもがな、NO COMMENTの名盤中の大名盤。これは初期SLAP A HAMのリリース作品の中で、CAPITALIST CASUALTIESと人気が二分したのではないだろうか。HERESYを彷彿させながら更にスピーディーに壊れまくり、究極のハードコアは全てが極限に達し、そんな完璧なまでのハードコア・レコードに震えが止まらない。これ以上言葉にならない強烈な1枚。1stプレスは1500枚のクリア・ヴィニール。2ndプレスは1000枚のブラック・ヴィニール。後に自主製作とDEEP SIXのディスコグラフィー盤に全曲収録。

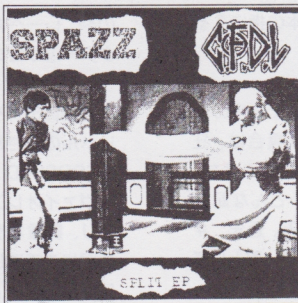
驚異の収録バンド数を誇る『Bllleeeeaaaauuurrrgghhhh!』シリーズ第2段の#12。なんと52バンド計69曲収録の記録更新。3000から4000枚プレスされているようだが未確認…。個人的にはMACABREとSLAVE STATE収録が嬉しい。意外なバンドが多数収録されているので要チェック。現在はEARECHEやRELAPSEといった大型レーベルからリリースしているバンドも収録し、彼等が元々どこに属していたのかわかるので、#7同様収録バンド名を眺めているだけでも面白いのだ。

#13はまたもやChrisの趣味丸出しのMELVINS。3000枚プレスで、5"、6"、7"の各クリア・ヴィニールが存在する。またそれぞれにステッカー付きのものや、レーベル部分の色違い等数種類存在し、コレクター泣かせの1枚。

初期のSLAP A HAM、パワーヴァイオレンス・バンドのレベルの高さが伺える#14。MAN IS THE BASTARDSとCROSSED OUTのスプリット盤で、どちらもパワーヴァイオレンスを語る上で絶対外せないバンドであり、貴重な歴史が詰まっている。マニア泣かせは極限にまで達し、ジャケットは写真を用いたタイプとロゴだけのものと2種類存在する。1stプレスは1000枚がレッド・カヴァー、残り1000枚がブルー・カヴァー。2ndプレスは1000枚。

#15はメキシコのANARCHUSと、オランダとスウェーデンの混合バンドMONASTERYのスプリット12"。CDやLPだけでなくカセット盤が存在するのは、前者がメキシコのバンドというのが理由だろう。両者とも文句なくグラインドコアであり、他の初期SLAP A HAMの作品が良すぎるので見落としがちだが、かなり格好良いレコードなのだ。未聴の人は是非!!! 個人的には後者MONASTERYに興味津々。なんと当時EARECHEと契約を結んでいたENTOMBEDのLarsと、後に日本盤もリリースしたオランダのブルータル・デスメタルSINISTERのRonとAADからなるバンドなのだ。6年前、AADにインタビューしたところ、このMONASTERYは単なるお遊びバンドで、デモを作っておしまいと言っていたが、じゃあこのスプリットの音源は何なんだ!?

2日間でレコーディングされた、1993年リリースのSPAZZの記念すべき1stEPが#16。以後、当時大量リリース中だったポルノ・グラインダーMEAT SHITSを越えるリリース・ラッシュとなった。また当

#21 M.D.C. / CAPITALIST CASUALTIES
『Liberty Gone』split 7"EP

#23 SPAZZ / C.F.D.L.
split 7"EP

#25 PLUTOCRACY
『Dankstahz』LP

時はグラインドコアと括られていた。彼等の場合、音楽性だけでなくこのフリークス趣味、プロレス趣味等々のユニークなアートワークも各方面に影響を与えた。1stプレスはイエロー・カヴァーで1000枚。2ndプレスはグリーン・カヴァーで700枚。

私としては#17がSLAP A HAMカタログの最強であり、星の数程存在するハードコア・レコードの中で、ハッキリ言って5本の指に入る。これ以上の暴力レコードと未だに出会っていないし、パワーヴァイオレンスなる言葉が最も相応しい暴力的サウンドに、私は当時スピーカーの前で完全KOされた。SLAVE STATEの数少ないリリース作品の中の1枚で、1曲目から超ブルータル・ハードコアが炸裂。何が彼等をここまで怒らせるのか。LACK OF INTERESTもSLAVE STATEに負けない暴力サウンドで応戦し、完全ノールールの初期『UFC』を彷彿させる程で、まさに音の暴力といったところ。また、この60年代辺りのアメリカを思わせるイラストが、単純ながらシリアスに冷酷な暴力を描き、このレコードに詰まっている暴力をより引き立てている。聴き過ぎてレコードの溝が心配…。

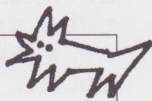
#18はCAPITALIST ASUALTIESのEPで、マッチョ思想、愛国主義に対する皮肉を込めたと思われるジャケットがナイス。1stEP、1stLP同様に初期SLAP A HAM、または初期CAPITALIST CASUALTIESが異常な程カッコ良いのは誰もが認めるであろう。今の彼等がカッコ悪いとは言わないが、この頃はやはり格別だ。2000枚プレスで、当時あの『Fiesta Grande』で売られていた超限定盤が50枚程存在する。

SLAP A HAMの魅力的な部分を私的に紹介するのであれば、この#19は必須である。コンピューターを駆使した最近のワザとらしいものではなく、切り張りして作られたパンクなデザイン・ワークが魅力的。これまでのRUPTUREからSLAP A HAMサウンドに変化した。レーベル面の「that means don't bootleg this, ya bastard!」なるコメントもナイス。

#21はCAPITALIST CASUALTIESと、MDCことMILLIONS OF DEADCOPSのスプリット7"EPで所謂ベネフィット盤である。STTIKY絡みで言えば、MDCの登場はあり得ない話ではなかったが、ここへ来てMDCがSLAP A HAMからリリースされたのは、西海岸ハードコア・シーンの人脈が垣間見れて嬉しい。一方のCAPITALIST CASUALTIESも彼等流の爆走ハードコアを炸裂している。CHAOS UK風のジャケットも良い、3000枚の1stプレスのみ。

日本のC.F.D.LことCRAZY FUCKED UP DAILY LIFEと、SLAP A HAMの総帥Chris率いるSPAZZのスプリット盤で2000枚プレスの#23。このレコードがリリースされた後、SLAP A HAMまたはSPAZZ周辺でカンフーやブルース・リー等の香港映画モノが急増した。やはり仕掛人はやはりChrisだと思う。SPAZZが香港に行ったからなのか理由は定かではないが、香港の某ブルース・リーの専門店でSPAZZのCDが売っていたのは興味深かった。

PLUTOCRACYの1stLPで、SLAP A HAMと625の共同リリース。625ナンバーだと#2。そのMaxとSPAZZのDanによるハンドメイド・シルクスクリーンのジャケットで、メイルオーダーのみの500枚プレスという、これまたマニア心をくすぐる1枚である。後にドイツのANOMIE RECORDSからフォーマットとジャケットを変えて再発された。

SLAP A HAM RECORDS
P.O. BOX 7337
ALHAMBRA, CA 91802-7337 U.S.A.
catalog@slapaham.com
http://www.slapaham.com

DEADLINE

UKハードコア・シーンの重鎮KNUCKLE DUSTのメンバー在籍Oi/ストリートパンク。下記のSLAPSHOTのサポートだけでなく、CONFLICTやBUSINESS、DAMNED等といった幅広いバンドとライヴを行なっているUK最重要ストリート・パンク。

SLAPSHOT

様々な問題によって左派ハードコア・パンクスから敵対視されていたキング・オブ・ボストン・ハードコア。最近は、時が解決したといえる程険悪なムードは立ち去った。背中を丸め腰を叩きながら「俺は老いた」とライヴ前に発言しておきながら、そこらの若手バンドとは比にならん程のクレイジーなライヴを展開。生きた証人として今後の活躍に期待。SLAPSHOT関連の話だが、NEGATIVE FXのLPが再発された。

This page photo : DEADLINE & SLAPSHOT
(by Efu Matsumoto)

This page photo : HELLNATION
(by Efu Matsumoto)

HELLNATION

JAPAN TOUR 2002

(問)各会場

全スピード・フリークス必見!!! 激速ハードコアHELLNATIONが再び来日!!! 今回のツアーに合わせてMCRよりHELLNATION、SLIGHT SLAPPERS、REAL REGGAEの3way CDの発売が急遽決定!!! 即売り切れる可能性大なのでお早めに。次号発売時点で、既に入手困難になってるかもしれませんが紹介します。

9/10 Maizuru @ Bad Brains
w/Real Reggae, Whatever, S.F.M.

9/11 Okayama @ Pepperland
w/Real Reggae, Idol Punch, and more.

9/12 Himeji @ Mushroom
w/Real Reggae, Core, and more.

9/13 Osaka @ Fandango
w/Real Reggae, Slight Slappers, and more.

9/14 Nagoya @ Huck Finn
w/Real Reggae, Slight Slappers, Out Of Touch, Nice View.

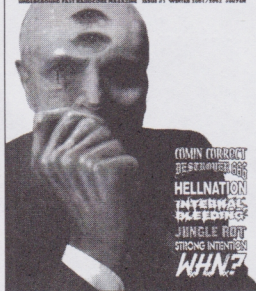
9/15 Tokyo @ 20000V
"Far East Fast Blast Festival"
w/Real Reggae, Slight Slappers, and more.

9/16 Tokyo @ Watts
w/Vivisick, Crucial Section, Exclaim, Flame, Fuck On The Beach, Shikabane, Struck, 324.

DS-13 DEMON SYSTEM 13

11月下旬～12月に、大人気スウェディッシュ・ハードコアがジャパン・ツアー決行!!

CEPHALIC CARNAGE

グラインド・ハードコアの中で最も革新的なCEPHALIC CARNAGEの待望の新作が、いよいよ今夏Ritual Recordsよりリリース。

BACK NUMBER

ISSUE #1

初版発行2001年12月1日 / 第2版発行2002年4月1日

COMIN CORRECT / DESTROYER 666
HELLNATION / INTERNAL BLEEDING
JUNGLE ROT / STRONG INTENTION
WHAT HAPPENS NEXT?

レコード店(ALLMAN、diskUNION等)に在庫がない場合は現金書留で、定価300円(税込)+送料140円(普通郵便代)を下記までお送りください。

F-FACTORY
〒192-0372 東京都八王子市下柚木2-31-7-103

次号#3は、年内には発売お楽しみに!!!

F-FACTORY & BRUTAL TERRORISM PRESENTS

FOR SPEED FREAKS

High Speed CHAMPIONSHIP

WORLD GRIND CHAMPION

GORE BEYOND NECROPSY

POWERVIOLENCE CHAMPION

FUCK ON THE BEACH

FASTCORE CHAMPION

EXCLAIM

CHARLES BRONSON CHAMPION

BRUTAL TERRORISM

LIVE CHAMPION

NO VALUE

都合により出演バンドが変更になる場合もありますので、ご了承ください。

2002.11.2(SAT) AT KOENJI 20000VOLT / OPEN 18:00 START 18:30

info. 20000VOLT...03-3316-6969

FAST FOR SPEED FREAKS

UNDERGROUND FAST HARDCORE MAGAZINE
ISSUE #2
350YEN

Speed kills

Vitamin X Holding On Reagan SS
Senseless Apocalypse Krigshot Gate
Gore Beyond Necropsy

FAST FOR SPEED FREAKS #2

F-FACTORY

FOR SPEED
FREAKS

ing On Reagan SS
ypse Krigshot Gate
ond Necropsy

FAST FOR SPEED FREAKS #2

F-FACTORY

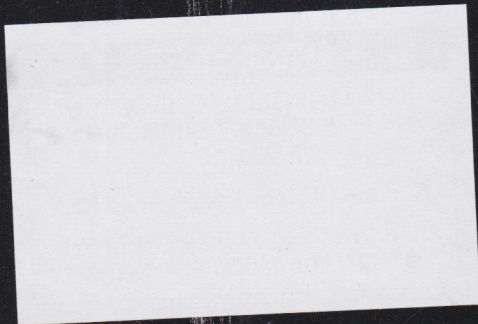
お詫びと訂正

2002年11月2日(土)20000VOLTで行なわれる『FOR SPEED FREAKS』に出演するバンドに誤りがありました。

㊝ FUCK ON THE BEACH → ㊣ NK6

バンドのメンバー及び関係者に御迷惑かけた事をお詫びすると共に訂正させて頂きます。

FAST

UNDERGROUND FAST HARDCORE MAGAZINE
ISSUE #2
350YEN

VITAMIN X
GOREBEYONDNECR
GATE
!REAGA
HO